

# 十全同窓会会報

〒920-8640  
金沢市宝町13の1  
金沢大学医学部  
十全同窓会会報  
編集委員会  
印刷/ヨシダ印刷(株)

(題字：中村信一 十全同窓会会長)

## 新年のご挨拶

十全同窓会会長 中村 信一



新年あけましておめでとようございます。

同窓会会員の皆様には、お元気で新春をお迎えのことと、お慶び申し上げます。年頭にあたり、母校金沢大学医学類・系ならびに十全同窓会の発展と、会員の皆様のご健勝、ご活躍をお祈りいたします。本年は母校創立百五十六周年、同窓会発足八十六周年になります。同窓会会則第二条「本会は、会員相互の親睦を図り、母校の発展を期することを目的とする。」、このことを新しい年の初めに、改めて胸に刻みたく存じます。

昨年は、本部ならびに各県支部の役員をはじめ会員の皆様から暖かいご支援・ご協力を賜り、深く感謝いたしております。本年も、会員相互の親睦の増進、十全同窓会報の充実、学生課外活動や医学図書館への整備補助等、基幹的同窓会事業の着実な推進に努める所存でございます。特に、各地の支部との連携を推進し、母校の発展と会員の皆様のご活躍に少しでもお役に立てるよう努めたく存じます。昨年は十四支部の総会が開催されました。ご尽力を賜りました支部長をはじめとする会員の皆様方に感謝申し上げますとともに、本年もより多くの地域で総会が開催され会員相互の親睦が深まることを祈念致します。

年頭にあたり、昨年及び本年の母校に関係したことを幾つか紹介させて頂きます。第一には、平成二十八年四月に開設された金沢大学先進予防医学研究科の件です。本研究科の研究機関として平成二十八年に医薬保健研究域に設置された

先進予防医学研究センターが、昨年六月に世界的な予防医学研究拠点の形成を目指し、大学全体の組織として学内共同教育研究施設に位置付けられました。関連して、平成二十六年以来のWHOとのコラボレーション活動が評価され、昨年四月、金沢大学は肝がんと肝炎対策の分野でWHOコラボレーティングセンターに指定されました(会報第一六六号)。今後は、先進予防医学研究センターの国際予防医学部門が担当部門としてウイルス性肝炎の撲滅をめざし、学際的な予防医学の研究と実践の展開が大いに期待されております。先進予防医学研究科・研究センターの本年の一層の発展を祈念申し上げます。

第二には附属病院に関する件です。昨年、文科省の多様なニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン(北信がんプロ)に採択、北陸初のスーパージックU設置、手術室一室増設、ハイブリッド手術室整備等、地域の拠点病院として益々充実してまいりました。本年は更に、臨床研究中核病院として選定され、地域の臨床研究拠点病院として発展されることを強くご期待申し上げます。第三は、金沢大学「ナノ生命研究所」設置の件です。高速・三次元原子力顕微鏡(AFM)、高速走査型イオン電導顕微鏡(SICM)等の金沢大学が世界に誇る最先端バイオSPM(走査型プローブ顕微鏡)を核とする「ナノ生命研究所」が世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)(医学系教員がコアメンバーとして参画)に昨年採択されたことです。医学類・医学系におきましては中核として金沢大学の「世界で卓越した教育研究」を牽引さ

れることを強く願っています。最後に、本年も会員の皆様にとつて、また、母校ならびに同窓会にとつて、よい年になりますよう祈念し、年頭のご挨拶とさせて頂きます。

### 目次

新年のご挨拶	1
就任挨拶	2
受賞	5
秋の叙勲	5
学会報告等	7
教授退職記念講演会のお報せ	8
論説	9
十全学術行脚	10
金沢から世界へ発信	12
病院紹介	13
教室だより	15
支部だより	17
クラス会	19
同窓生の消息	21
学生課外活動支援報告	23
十全昔話	26
学生コーナー	28
編集後記	30

## 就任挨拶

## 西山 正章博士

## 組織細胞学教授に就任



はじめまして。平成二十九年十月一日付けで、井関 尚一先生の後任として組織細胞学研究分野に着任致しました西山正章と申します。私は平成八年に長崎大学医学部を卒業後、九州大学第三内科(病態制御内科)に入局し、内科医として臨床に従事しました。その後、平成十三年より九州大学生体防御医学研究所(中山敬一研究室)に所属し、これまで基礎研究を続けて参りました。私にとりまして

金沢は縁もゆかりもない土地ですが、私の母校であります長崎大学と同様に、その歴史ある土地柄と自由な校風にとっても魅力を感じております。

私が研究対象としている自閉症は、非常に頻度の高い精神疾患(発達障害)の一つで、全人口の約一・五%が発症すると言われています。自閉症の原因として、胎児期の神経発達障害が以前から示唆されてきましたが、具体的な発症メカニズムは謎でした。近年、自閉症患者にお

る遺伝子変異の大規模な探索により、最も変異率が高い遺伝子としてCHD8が発見されました。CHD8は、染色体構造を変化させるクロマチンリモデリング因子というたんぱく質の一種です。私たちは今までCHD8の研究で世界をリードしてきましたが「Nature Cell Biol. 11: 172 (2009)」最近、ヒト自閉症患者と同じようにCHD8遺伝子変異を持つマウスでは、ヒトの自閉症で観察されるコミュニケーション異常や固執傾向が強まるという現象を発見しました「Nature 537: 675 (2016)」。

医学部教育におきましては、私は二年生の難関とされる組織学を担当致します。私が医学部で教育を受けた頃の組織学は、単なる形態学に過ぎませんでした。これからはその背景にある遺伝学や生理学の知識と結びつけることが重要だと考えていますので、形態と機能をつなげるような教育をしたいと思えます。その上で、医学部出身の基礎研究者を増やしたいと思えますし、私は臨床もやってきましたので研究マインドをもった臨床医を育てたいと考えています。若輩者ではありませんが、他の先生方と一緒に、金沢大学を世界一にするお手伝いをしたいと思っておりますので、今後ともご指導・鞭撻を賜りますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

## 米田 隆博士(平成二年卒業)

## 金沢大学国際基幹教育院GS教育系教授に就任



平成二十九年十月一日付けで、金沢大学国際基幹教育院GS教育系・健康科学担当教授を拝命いたしました。

私は平成二年に金沢大学医学部を卒業し、旧第二内科(竹田 亮裕教授、現、循環器病態内科学)に入局、同時に大学院に進学し、副腎内分泌学、特に高血圧を中心とする心血管内分泌学の研究を始めました。直接の研究指導には、宮森 勇福井大学第三内科名誉教授、武田 仁勇金沢大学附属病院先端医療センター特任教授が当たって頂き、血管や心臓におけるアルドステロン産生という世界的な発見に携わることができ、平成六年度に医学博士号を取得しました。

その後、馬淵 宏教授、山岸 正和教授の指導の下、患者さん中心の医療現場の中から臨床ニーズを明確にし、シーズを探索し、基礎医学だけでなく理工学や人文社会学などの多領域の研究グループと連携した医療機器・体外診断薬開発や遠隔診療の研究・開発に従事してきました。この経験をもとに平成二十六年からは未来医療研究人材養成拠点形成事業プログラム

ラムマネージメント室の所属で、研究・開発、レギュラトリーサイエンスを駆使した臨床研究、薬事承認の流れや必要な法律、規制を医師や医療従事者に指導する機会を得ました。また、自らも原発性アルドステロン症の治療方針決定に必要な副腎静脈サンプリングの成功率を改善させる迅速コルチゾールキットの開発に成功し、特許を取得し、企業化、診療方イデオラインでの推奨を取得し、海外薬事承認取得を行うことができました。

現在は、未来医療研究人材養成拠点形成事業業務を兼任しながら、医学部生だけでなく全学部生を対象に、現在の超高齢化社会の中、健康寿命の延伸という社会的問題を医薬保健研究域だけでなく、人文社会学、理工学の各領域と融合して解決していく必要性があることを、身近な個々の健康問題に関連付けながら教えています。今後は、循環器、内分泌領域を、更には医薬保健研究域を超え、他の研究分野を横断的に融合させながら、健康寿命の延伸に繋がる未来型の医療・ヘルスケアに関する研究を行い、また、人類の健康のために未来の医療を牽引するよう人材を金沢大学から生み出せるよう邁進していきたいと思っております。

最後になりましたが、金沢大学医学部十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 川原 範夫博士 (昭和五十八年卒業)

### 金沢医科大学医学部長に就任



平成二十九年九月一日に金沢医科大学高島茂樹理事長から辞令を賜り、横山仁教授の後任として医学部長に就任致しました。

平成二十二年四月に金沢医科大学整形外科に特任教授として着任して以来、脊椎・脊髄外科部門の責任者として医学部学生・大学院生の教育、研究指導を行い、平成二十八年四月には整形外科講座主任を拝命致しました。その間、平成二十五年九月に当時の勝田省吾学長から学生部長に指名され、学業・学生生活・課外活動の各支援室や学校保健室などを通して学生の支援を精力的に四年間行つてまいりました。

文部科学省の医学教育モデル・コア・カリキュラムの平成二十八年改定では「多様なニーズに対応できる医師の養成」が目指されています。国民から求められる倫理観、医療安全、チーム医療、地域医療、健康長寿社会などのニーズに対応できる実践的臨床能力を有する医師を養成する目的です。現在、世界医学教育連盟の国際基準に基づき、日本医学教育評

価機構が実施する医学教育の分野別機能評価を二〇一八年六月に金沢医科大学も受審することが決定し、現在、鋭意整備を進めているところです。

急激な医学・医療技術の進歩に比例して医学部六年間で学ぶべき知識は膨大でさらに増え続けています。医師国家試験では記憶力だけでなく、情報を見極める応用力を判定する傾向になっていきます。

やはり、実際の患者さんの協力を得た地道な臨床実地教育が大切と考えています。病気を患った患者は不安なものです。

医師は患者だけでなく患者の家族の気持ちも含め、しっかりと推し量ることが大切です。頻繁に病室に足を運び、十分なコミュニケーションのもとに患者の信頼を得たうえで、患者を自分の家族のように考え、心一つにして誠心誠意病気に対して立ち向かうことが大切です。また治療がうまくいったときは心から喜びを共有できる人間性あふれる良医になることが理想です。医師は患者の味方です。六年間を通じた医療倫理教育が極めて大切と考えています。もちろん医師、医学生も医療従事者である前に一人の人間、社会人です。人として社会人としての倫理教育も神田享勉学長の下で今後充実させてまいります。このことが金沢医科大学の建学の精神である「良医を育てる」ことにつながると思っています。

これからもよろしくお願ひ申し上げます。

## 岩淵 邦芳博士 (昭和五十九年卒業)

### 金沢医科大学大学院医学研究科長に就任



平成二十九年九月一日より金沢医科大学大学院医学研究科長に就任しました。

私は、昭和五十九年の卒業後、金沢大学第三内科(血液・呼吸器内科)に入局し、当時の松田保教授、原田実根講師(前九州大学第一内科教授、塩原信太郎助手(石川県赤十字血液センター)所長)にご指導をいただきました。昭和六十三年に学位を取得し、留学後の平成七年より金沢医科大学血液免疫内科に赴任しました。平成九年に金沢医科大学学生化学Ⅰに移籍し、平成二十一年に伊達孝保教授の後任として生化学Ⅰ教授に就任しました。

金沢医科大学大学院医学研究科は、独自のな医学研究あるいは高度な専門医療を自立して遂行できる医療人の育成を目指しています。昭和五十七年の開設以来、長らく大学院学生数が定員に達しませんでした。臨床研修二年目からの入学を可能にする制度や中国姉妹校からの学生受け入れ制度などの整備により、ここ数年ようやく定員百四十名近くの大学院生が在籍するようになりました。また英語論文での学位取得数も増えてきており、少しずつですが大学院教育のレベルが上

がってきたように感じしております。大学院修了生が必ずしも研究医として活躍していくわけではありませんが、研究を通して身に着けた論理的思考能力は臨床現場での診断・治療に必ず役立つと考え、大学院教育のさらなる充実を目指してまいります。

平成十九年に、金沢大学を中心とした北陸三県の医学部をもつ大学と石川県立看護大学による「北陸がんプロフェッショナル養成プログラム」(北陸がんプロ)が、また平成二十六年に北陸三県の医学部をもつ大学による「北陸認知症プロフェッショナル養成プログラム」(認プロ)が、いずれも文部科学省補助事業として採択されました。これに伴い金沢医科大学大学院では、がん専門医養成系コースを平成二十二年に、認知症専門医養成系コースを平成二十七年に設置しました。これまで二十七名、三名がそれぞれのコースを専攻しています。北陸がんプログラムは、平成二十九年から信州大学も加わり、「超少子高齢化地域での先進的がん医療人養成」を目指す「北信がんプロ」としてさらに充実したものとなりました。

金沢大学医学部十全同窓会の皆様には、教育・研究・医療すべての面において、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りたくお願ひ申し上げます。最後になりますが、金沢大学医学部および十全同窓会の益々のご発展を祈念し、挨拶とさせていただきます。

## はい えいしゅ 英洙博士 (平成十年卒業)

### 慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科特任教授に就任



この度、平成二十九年十月一日付けで、慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科特任教授を拝命いたしました。私は平成十年に本学を卒業し、故・渡邊洋宇教授が主催されていた旧第一外科(現…先進総合外科)に入局し、多くの先生方にご指導頂きながら外科医としてスタートしました。金沢大学大学院医学研究科では外科病理学の研究を行い、病理医として働く機会も頂きました。外科医・病理医として仕事を続けていく中で、病院における医療職の過重労働や過酷な労働環境を目にし、病院経営やマネジメントの必要性を痛感するようになりました。一医師としてやりがいや使命感を持っていたものの、医療職が働きやすい病院づくり、地域に必要な病院が存続するための経営体制構築に対する思いが強くなりました。そこで、医師キャリアを一旦休み、

慶應義塾大学大学院経営管理研究科(慶應ビジネススクール)にて、医療政策の第一人者の田中滋教授(現…名誉教授)に師事し医療政策・医療機関経営を学びました。フランスのグランゼコールESSEの大学院では医療機関のブランドイメージ戦略に関しても学ぶ機会を頂きました。現在は医療機関経営に特化したコンサルティング会社であるハイズ株式会社代表として、全国各地の医療機関の経営支援や再建を行っております。昨今の医療財政の逼迫や高齢化による患者増加の影響で、病院の経営環境や医療職の労働状況は厳しくなる一方です。そこで、慶應義塾大学が高度医療経営人材を養成する目的で新しい講座を立ち上げ、今回の任を拝命いたしました。若輩者ではありますが、医療職のメインドを持つた医療経営人材の育成に努めたいと思っております。私をここまで育てて頂いた金沢大学医学部および十全同窓会にあらかじめ感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



## 石浦 嘉久博士 (大学院平成十年修了)

### 関西医科大学内科学第一講座総合医療センター 呼吸器腫瘍アレルギー内科教授に就任



十全同窓会の先生方におかれましては、ますますご清祥のことと拝察いたします。このたび、平成二十九年九月一日付けで、関西医科大学内科学第一講座総合医療センター呼吸器腫瘍アレルギー内科教授を拝命いたしました。私は平成元年に鳥取大学医学部医学科を卒業し臨床研修を経て金沢大学大学院医学研究科内科学第三講座(松田 保教授)に入學しました。これまで中尾真二教授、藤村 政樹前臨床教授(現国立病院機構七尾病院長)、笠原 寿郎臨床教授のご指導のもと、難治性気管支喘息、難治性慢性咳嗽及び肺癌に関する研究、臨床に従事して参りました。

気道におけるアレルギー反応に重要な役割を担う好酸球がそのおかれた環境や誘導機序の違いにより生体内においては異なった役割を果たしうることを実験的に証明し、その原因の一端を解明した研究により学位を取得しました。この後も大学で更なる発展研究を行う一方、自律神経系の特殊病態下難治性喘息における気道収縮の機序解明に関する基礎的な研究も行いました。また本学が世界に先駆けて構築した難治性咳嗽の動物実験モデルの作成に関わる機会もいただきました。当時はまだ十分に解明されていなかった咳嗽の病態が基礎的研究で次々と明らかになってゆくさまを目の当たりにすることができ、加えてその一端に貢献できたことは研究者として無上の喜びでもありました。この基礎的な検討事項をその後の関連市中病院において臨床研究として継続発展できたことは、金沢大学の先生方のご指導はもちろんのこと十全同窓会の諸先生方のご支援ご鞭撻によるものであり、心より感謝しております。

新任の関西医科大学は昭和三年に創立された大阪女子高等医学専門学校に端を発する伝統ある関西の名門校です。その中で最も歴史ある内科学第一講座の教授職として任用していただきました。ご推挙いただきました関係の方々には厚く御礼申し上げますとともに、責任の重大さもまた痛感しております。本学で教えていただいたことを忘れることなく、臨床、教育、研究に日々誠心誠意取り組みたく所存です。

最後になりましたが金沢大学医学部および十全同窓会の皆様におかれましては、今後とも変わらずご指導ご鞭撻いただけますよう、宜しくお願い申し上げます。

### 日本てんかん学会功労賞受賞

山口 成良名誉教授

(昭和二十七年卒業)

平成二十九年十一月四日、京都府の国立京都国際会館で行われた第五十一回日本てんかん学会で、山口成良金沢大学名誉教授が学会功労賞を授与されました。同賞の選考の際に山口先生に寄せられた推薦の理由としては、(一)第二十二回日本てんかん学会の会長をされ、長期計画委員会委員長としても活躍された。(二)長年にわたる、てんかん医療、てんかん研究・教育における多大な功績。(三)学術活動として視床の神経機構、中心脳の解明に尽力され、全般てんかんの病態生理研究に寄与されたことが挙げられました。

金沢大学医学部神経精神医学教室のてんかんの研究は故秋元 波留夫教授に始まり、次いで大塚 良作教授が後を継がれましたが早逝され、その後を山口先生が引き継がれました。山口先生の指導の下、キンドリリングに関する実験研究や当時まだ揺籃期にあつた抗てんかん薬の血中濃度に関する臨床研究、さらに近年の脳画像を用いた臨床研究など、多くの若い教室員がてんかん研究に参加しました。その結果、学位論文をはじめ多くの優れた国際的な研究論文が生まれ、当教室はてんかん研究の有数な一牙城として国内外に認められました。これもみな山口先生の時流を觀た的確ななじ取りと、今は伝説になっている一日二食の弁当を携え、土、日曜日の休日にも変わりなく大学に出て来られて、朝早くから夜遅くま

で仕事に没頭しておられた先生の御精励ぶりを範として教室員皆が努力した結果と思えます。今回の受賞にあたりてんかん研究に参加した教室同窓会員一同、心からの祝意と謝意を表したいと思います。(地引 逸亀 記)



中村 彰氏 (昭和三十四年卒業)

### 日本対がん協会賞受賞

平成二十九年九月八日、金沢市で開催された第五十回「がん征庄全国大会」で、六個人・一団体が「日本対がん協会賞」を受賞・表彰された。その六個人の部で昭和三十四年卒業の中村 彰氏(金沢市)が受賞された。長年、子宮頸がん検診の精度管理の充実・向上に貢献したことが評価された。(赤祖父 一知 記)

### 秋の叙勲

旭日双光章

林 義則

瑞宝双光章

木村 良平

### 平成二十九年度岐阜医学功労賞

子どものこころの発達研究センター特任教授

東田 陽博 (特別会員)

平成二十九年五月二十日、岐阜大学医学部記念会館で一般社団法人岐阜医学研究協議会から岐阜医学功労賞を受賞しました。「神経化学基礎研究の第一人者として優れた業績を上げるとともに、自閉症の社会障害の神経内分泌学的見地による治療法の開発に多大なる貢献をした」ことに對する賞でした。

私は岐阜大学医学部に在学中そして、名古屋大学大学院生として、グリアと神経細胞の膜電位比較の研究を行い、その成果を持って昭和五十四年に米国NIHのニールンバーグ博士の下へ留学できました。当時、ニールンバーグ研究室は、遺伝子暗号の解読による昭和四十三年のノーベル賞受賞から約十年を経て、記憶

暗号の解読プロジェクトの到達点に來ており大変活気がありました。

その後、金沢大学がん研究所に赴任し、細胞内信号伝達系と短期記憶の研究を行いました。医学系大学院に移ってから、社会性認識に関わる神経内分泌物質であるオキシトシン(OT)の脳内分泌のメカニズムを解明しました(Jin et al., Nature, 2007)。

相手を認識し記憶できない病気である自閉スペクトラム症(ASD)をOTの作用面から研究する「子どものこころの発達研究センター」を二〇〇八年に新設しました。その中で、医師主導臨床研究として、OTがASDの対人交流行動を改善することを見出しました。



## グッドデザイン賞を受賞して

社会医療法人財団董仙会恵寿総合病院 理事長  
神野 正博 (昭和六十一年大学院卒業)

赤いGマークはご存じだろうか？日用品から、電化製品、車、建物などいろいろな所にグッドデザインマークが付く。古く昭和三十二年に創出されたGマークは、公益財団法人日本デザイン振興会が認証し、日本の工業製品に安価、使いやすいだけでなくデザイン性を付加してきた。これまでの受賞件数は四万件に及ぶという。また、昨今では海外企業にも認知され応募が殺到している。また、九十年代後半より、モノだけではなく仕組みやプロセス、すなわちコトに対しても顕彰する仕組みとなるなど時代の動きも反映している。

そんな中、グッドデザイン賞2017は、これまで最多の四千四百九十五件の応募に対して、八十二人の審査委員が五か月にわたり審査し、千四百三十三件が認定された。恵寿総合病院では、仕組みのデザインとして、「ユニバーサルレイアウト」による「ユニバーサル外来」を応募した。その結果、グッドデザイン賞2017ばかりではなく、より上位のBEST100賞、特別賞「未来づくり」、審査委員特別賞「私の選んだ一品」の四賞受賞という快挙を達成した。

「ユニバーサル外来」とは？フリーアドレス診察室と電子カルテの仮想化技術により実現した全科対応型外来のこと。各科完結型外来から全科対応型外来へをキーコンセプトとして、平成二十六年一月に運用を開始した新病院から実施した。その実際を以下に記す。

一般に病院の外来には各診療科の診察室がある。そこでは各科ごとのスペースと人員が必要になり、患者の移動動線も長く



新病院建築時にその課題をユニバーサルデザイン視点で見直し、すべての人にやさしい外来を作った。どの科にも紐づけられていない均一な診察室（フリーアドレス診察室）を複数用意し、電子カルテを仮想化し、デジタルサイネージで誘導する「ユニバーサル外来」である。仮想化技術によって医師はどのPCを使ってもいつもの自分のPC環境を保証される。受付は一つで複数の科をカバーし、診察室の編成を「今日は内科、明日は外科」というように弾力的に患者数、医師数により変えることができる。これからの高齢化社会を迎えるに当たり、わかりやすく、動線が短く、かつ負担の少ない外来運用の意義が高まる。また、医師だけでなく看護外来・栄養指導などで、ほかの医療スタッフも使うことができる。

審査員からは、様々な人間の行動を人間側のニーズに合わせて、人間にとって優しく寄り添うテクノロジー（最新技術）を利用し、システムに振り回されないデザインとして評価された。

## 看護師特定行為研修了生誕生

恵寿総合病院長、看護師特定行為研修センター長  
山本 健 (昭和四十八年卒業)

平成二十七年十月から開始された「看護師特定行為研修制度」の第一期修了生五名（写真）が誕生しました。この研修を実施できる指定研修機関は、平成二十九年八月現在で全国に五十四施設認められています。当院は東海・北陸地区の病院（看護系大学を除く）として最初に指定研修機関の認可を受けました。

看護師特定行為研修制度は、従来医師に限定されてきた「医行為」の一部を看護師に開放する規制緩和の一環であり、研修を修了した看護師は、事前に作成される医師の「手順書」に従って、医師の直接的な指導がなくとも医行為の実施が可能になります。「特定行為」には二十一分三十八行為があり、研修可能な区分と行為は、指定研修機関によって異なります。

当院の研修生は、呼吸器三区分六行為、栄養一区分三行為の計四分八行為を修了しました。全国的に見ると、今後在宅医療の場が必要が増すと予想される医行為として呼吸器（人工呼吸器の設定変更、気管カニューレの交換など）、「創傷管理（褥瘡管理など）」、「栄養及び水分管理に係る薬剤投与（胃ろうの管理、輸液の実施、高カロリー輸液の投与量調整）」の研修を提供している研修機関が多く見られます。

特定行為研修を修了した国内の看護師数は、平成二十九年八月現在で五百八十三名（国内看護師総数百十四万人の0.05%）に過ぎません。厚労省は二〇二五年までに

修には患者を対象とした実習や実技試験（OSCE）が含まれ、教育する側の負担が重いことなどから、研修施設数と研修了者の増加は目標を大幅に下回っているのが現状です。

この研修制度の目的は、看護師が医師の診療を補助して医師の負担軽減を図ること、ならびに在宅患者さんに遅延なく必要な医行為を提供することです。苦勞して特定行為研修を修了した看護師さんが、専門家としてのやりがいを感じつつ実力を発揮できるよう、医師側の理解と協力が重要です。

第一期生の修了式に続いて、第二期生のうち二名は富山市と金沢市に勤務する看護師さんであり、当院外からの研修生を初めて迎えることになりました。



恵寿総合病院看護師特定行為研修第一期修了生 (平成二十九年九月二十九日)

第四十九回

日本小児感染症学会総会・学術集会

イン2017「EBV関連リンパ増殖性疾患の病態解明と制御戦

平成二十九年十月二十一日(土)と二十二日(日)の二日間、第四十九回日本小児感染症学会総会・学術集会在、ホテル日航金沢、ANAクラウンプラザホテル金沢、金沢市アートホールなどを会場として開催されました。参加者数は年々増加しており、今回は招待者も含めて千四百五十一名に達しました。本学会のテーマは、「患者に聴き、症例から学ぶ「Think Debat」」としました。感染症の複雑な病態に果敢に挑戦する、情熱溢れる若い小児科医、指導医そして研究者にとって魅力のある学会となるよう、様々な工夫がされました。

開会式の後、学会長の谷内江 昭宏による「泉熱再考―病原体と免疫応答」と題した講演がありました。理化学研究所、大野 博司博士には「腸マイクログロブリンと疾患・生体防御・免疫」と題して、また大阪大学遺伝学、吉森 保教授には「細胞の守護者オートファージ・感染症などの疾患に対抗する細胞内大規模分解システム」と題して特別講演をお願いしました。韓国Samsung Medical Center, Yae-Jean Kim先生には「Lessons from a MERS-CoV outbreak: epidemiology, clinical manifestation and infection control」と題して招待講演をして頂きました。さらに、本学の所 正治先生、藤永 由佳子先生、華山 力成先生を含む九名の先生に感染症に関わる基礎・臨床のトピックスについて教育講演をお願いしました。その他に、シンポジウムとして「感染症診療のパラダイムシフト―システムパイオロジーの視点からインフルエンザ治療を考える―」、「小児感染症指導医・認定医について」、「小児呼吸器感染症ガイドラ

略」が、さらにインタラクティブセッションとして「感染症と免疫異常」が企画されました。

一般演題は、口演二百七十七題、ポスター二百二十題と多くの演題が寄せられました。いずれも大変興味深い発表でしたが、口頭発表に対する Young Investigator Award や、ポスター発表に対するポスター賞の授与は、若い小児科医にとって大いに励みになったようです。

懇親会では、ひやくまんさんのお出迎えと華やかでインパクトのある炎太鼓の演出と美味しい地酒と加賀料理で参加者に満足して頂けたと自負しています。選挙の日曜日台風襲来などが重なりながらも多数の参加者を得られ、学術的にも懇親の意味でも実り豊かな学会となりました。十全同窓会のご支援に改めてお礼を申し上げます。

(谷内江 昭宏 記)



ポスター会場での熱い議論

第二十五回

日本精神科救急学会学術総会

一般演題も七十九演題を数え、医師、看護師、精神保健福祉士、作業療法士、

平成二十九年十一月二日〜三日の二日間、金沢市文化ホールおよび金沢ニューグランドホテルにて、第二十五回日本精神科救急学会学術総会を三邊 義雄大会長のもと、副大会長を松原 三郎先生(社会医療法人財団松原愛育会松原病院)、北村立先生(石川県立高松病院)にお願いし開催させていただきました。カニの解禁日前であったことと、全く同日に、島根にて日本臨床精神神経薬理学会も開催されていたため参加者不足を懸念しておりましたが、六百五十名を超える参加を得て、盛会裏に終えることができました。

今学術大会は、「総合医療の中の精神科救急」をテーマに、薬物療法から法制度問題、退院支援から看護問題まで幅広い内容について取り上げることができました。特別講演では金沢大学大学院医学系研究科血液情報発信学(救急医学)の後藤 由和先生をお迎えして「一般救急における精神科対応」について具体的な症例を交えて分かりやすく講演していただきました。また、「せん妄診療Up-to-date」、「精神科救急医療の立場から措置入院制度を考える」、「精神科救急病棟における薬物使用障害治療の可能性」、「地域における精神科救急医療の在り方」、「精神科救急・急性期医療における作業療法の意義」、「医療と司法の境界例」と精神科救急の相模原事件が示唆するもの」の六つのシンポジウムを開催し熱い議論を交わしていただきました。さらに、教育研修コースでは、「大災害と拠点病院」その時あなたはどのように動く!?」と題して、災害拠点精神科病院機能訓練を開催いたしました。

薬剤師の多職種から発表していただきました。

市民公開講座では、金沢大学大学院医学系研究科血液情報発信学(救急医学)稲葉 英夫先生による「上手な119番通報が命を救う!」のご講演いただいた後に、能美市消防本部から谷川 昌弘救命救急士と坂本 吉弘消防指令センター通信指令員による救急電話のかけ方のデモンストラーションを一般市民にも参加していただきました。

懇親会には約百人の会員が参加し、西茶屋街から芸妓さんをお迎えして素敵な踊りの披露と、会員が飛び入り参加しての御座敷太鼓を経験していただき、金沢



次頁3段目に続く

## 第三十六回 日本認知症学会学術集会

平成二十九年十一月二十四日(金)から十一月二十六日(日)に石川県立音楽堂、ANAクラウンプラザホテル金沢において、金沢大学大学院脳老化・神経病態学(神経内科学)の山田 正仁が会長を務めさせていただき、第三十六回日本認知症学会学術集会を開催いたしました。一般参加および招待者を併せて三千五百三十名の参加を得て、盛会裏に学術集会を終えることができました。

今回の学術集会では、「認知症を診る、治す、防ぐ」地域から研究へ、研究から地域へ」をメインテーマとし、認知症克服を目指す臨床医や研究者など、認知症に関わる様々な領域の専門家が集まり、地域や臨床の現場における認知症の問題、その解決のための研究の展開、研究成果に基づく新しい診断・治療法、地域における認知症予防、専門家の育成など



の議題について発表や討論が行われました。主な学術集会の企画として、プレナリーレクチャー、学術教育講演、外国人講師をお招きしたシンポジウム、NeuroCPC、多職種連携ワークショップおよびホットトピック徹底討論を開催いたしました。また、北陸認知症プロフェッショナル医養成プラン(認プロ)とのジョイント企画として、国際シンポジウムと市民公開講座を開催いたしました。今回の学術集会では、認知症診療における多職種連携の必要性から、初めての試みとして医師以外のメディカルスタッフの参加枠を設けました。

プレナリーレクチャーでは外国からの招待講演として、ケンブリッジ大学のCarol Brayne先生とニューカッスル大学のIan McKelvie先生にご講演いただきました。シンポジウムでは認知症に関連した基礎研究の最新知見から実臨床における治療やケアに関する現状や今後の展望が報告され、参加者との活発な討論が行われました。特に、当教室のスタッフが提案や講演者の招待から関わった英語でのシンポジウムも行われ、最新知見に関する紹介や討論が行われました。

一般演題と学会奨励賞には三百七十五演題を応募いただきました(うち学会奨励賞候補は二十四演題)。ポスター発表では、これまで通り個別のプレゼンテーションは行わないこととしましたが演者と参加者で大変活発な議論が行われました。また、日本認知症学会学会賞選考委員会の投票を元に、会員総会・授賞式において九演題を学会奨励賞として表彰いたしました。

本学術集会の開催にあたっては金沢大学神経内科の教室員の多大なご協力をいただきました。また、皆様のご支援で実りのある学会になりましたことに深謝いたします。(坂井 健二 記)

の食と文化に触れていただきました。最後に、本学術集会開催にあたりましては、石川県、金沢市、石川県医師会、金沢市医師会、関連機関、企業、済美会

を始め、十全同窓会関係各位には多大なご協力を賜りました。改めて御礼申し上げます。(長澤 達也 記)

## 教授退職記念講演会のお報せ

謹啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます  
さて金沢大学医薬保健研究領域医学系(再生分子医学研究分野) 横田 崇教授、金沢大学医薬保健研究領域医学系(循環器病態内科学分野) 山岸 正和教授には平成三十年三月三十一日をもって医学系教授をご退職されます  
それに際しまして その御高德と御功績に対し感謝の意を表したいと存じ 左記のとおり記念講演会を挙行することとなりました  
つきましては 御多用のところ誠に恐縮ですが 記念講演会への御臨席を賜りますようお願い申し上げます  
謹白

平成二十九年十二月吉日

金沢大学医薬保健研究領域医学系長 多久和 陽

### 記

一、記念講演会  
日時 平成三十年三月五日(月)午後四時三十分から  
場所 金沢大学宝町キャンパス医学類G棟二階 第三講義室  
演題 「一基礎医学研究者が歩んだ四十二年」 横田 崇 教授  
「画像から遺伝子診断へ…先制医療への道」 山岸 正和 教授  
(記念講演会後の記念式は行いません)  
事務担当 医薬保健系事務部総務課医学総務係

(電話番号) 〇七六・二六五・二二〇〇



# 北信がんプロ

金沢大学がん進展制御研究所腫瘍内科

金沢大学附属病院がんセンター

矢野 聖二

はじめに

がんプロフェッショナル養成プラン（がんプロ）は、がん対策基本法が施行された平成十九年から開始され、今年で三期目を迎えます。本事業は、文部科学省の大学間の連携による「がん医療人材養成拠点」において、各大学の特色を生かした教育プログラムを構築し、がん医療の新たなニーズに対応できる優れた「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」を養成することで、我が国におけるがん医療の一層の推進を目的として実施されています。がんプロの採択チーム数は第一期が十八、第二期が十五、そして第三期が十一と徐々に減少し、今回の選考は大変厳しいものでした。私が統括コーディネーターを仰せつかりましたが、準備委員会で金沢大学の絹谷教授、吉崎教授、中田教授にアイディアをいただき、先端科学・イノベーション推進機構（O-FSI）の石川さんの支援を得て申請書類を作成し、山崎金沢大学長、濱田信州大学長、蒲田金沢大学附属病院長にもご出席いただいたヒアリングで逆転して、何とか採択にこぎつけることができました。ご尽力いただきました皆様方、この場をお借りしてお礼申し上げます。

北信がんプロは五年間のプロジェクトですが、その概要を紹介します。

## 一、北信がんプロのテーマ

北信がんプロでは、北信四県（長野県、富山県、石川県、福井県）の平成二十七年の生産人口（十五〜六十四歳）が全国平均の平成四十二年のそれよりも少ない

（総務省統計局統計データより）ことから、北信地域を超少子高齢化地域と位置付け、「超少子高齢化地域での先進的がん医療人養成」をテーマに掲げました。第三期の北信がんプロでは、第二期までの北信がんプロ（金沢大、富山大、福井大、金沢医大、石川看護大）の実績を踏まえ、全国初の遺伝子診療部を設立し先駆的ゲノム医療を行っている信州大を加えた国公私立の六大学で、県の枠を超えた北信地域で戦略的にがん医療人を育成するシステムの構築を目指します。

## 二、教育コース

がんは、我が国の死因第一位の疾患で、生涯のうち約二人に一人が罹患すると推計されるなど国民の生命及び健康にとつて重大な問題となっており、新たながん対策が求められています。北信がんプロでは、がんゲノム医療、小児がん、希少がん、AYA（Adolescent and Young Adult）世代や高齢者等のライフステージに応じたケアに対応できる医療従事者を養成してまいります。教育コースとしては、社会人コース（インテンシブコース）を平成三十年一月から、大学院生コースを同年四月から開講予定です。いずれのコースも、e-learningによる講義とテレビ会議システムを用いた演習で学習していただきます。演習は多職種連携を推進するために行いますが、がんの病態や診断、治療に焦点を絞ったオンラインセミナーとケアに焦点を絞ったオンラインプロジェクト事例検討会があり、連携校やがんプロのTV会議システムを導入していた

だいている北信四県のがん拠点病院で受講していただけるようになっていきます。ご興味のある方は、インテンシブコースをぜひ受講してみてください。受講希望を北信がんプロ事務局（gpro@med.kanazawa-u.ac.jp）にご連絡ください。

## 三、海外FD研修

スタッフ研修として海外FD研修を実施し、最先端のゲノム医療や緩和ケア、グリーフケアなどの研修を行います。今年度は、ゲノム医療の研修として、米国ワシントンDCの国立がん研究所（NCI）と国立ヒトゲノム研究所（NHGRI）に五大大学から十二名を派遣します。さらに、緩和ケアの研修としてオーストラリアのメルボルン市モナッシュ大学等の施設に五大学から十四名を派遣します。海外FD研修の参加者には、帰国後テレビ会議のFD講習会で成果報告をしてもらい、北信四県の医療スタッフに成果を還元してもらう予定です。

## 四、地域がんデータベース

北信がんプロの目玉として、特色ある症例の地域がんデータベースを構築いたします。これは、このプロジェクトに協力してくれる北信四県のがん診療連携拠点病院の院内がん登録データ等を活用し、免疫チェックポイント阻害薬使用症例や小児・AYA世代がん症例、障がい者のがん症例など、特色のある症例のデータを集めて解析し、毎年大学院生に学会発表させ、最終的に英語論文としてまとめて業績を上げることにより、大学院生や教育スタッフのモチベーションを高め事業の求心力を保ちます。また、その成果を北信四県の将来のがん対策立案に活用します。

## 五、社会への情報発信

市民の皆さんに正しいがんの知識を持っていただき、検診受診による早期発

見、早期治療、早期社会復帰ができる社会の実現に向けて、ホームページ（<http://www.gan-pro.net>）や市民公開講座などで情報を発信してまいります。市民公開講座は四県の持ち回りで毎年開催し、平成二十九年度は元テレビアナウンサーの清水健さん（奥様が出産後百二十日で乳がんのため他界）をお迎えし、十月二十九日に十全講堂で行いました。平成三十年は、十二月に福井市、平成三十一年は長野市で開催の予定です。ホームページもリニューアルし、受講生はもろろんのこと、一般の方にも見ていただきやすいようにいたしました。

## おわりに

北信がんプロは、北信四県のがん拠点病院などの医療機関、医師会、行政、患者会とも連携して活動してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ申し上げます。



北信オンコロジーセミナーの開催風景  
（平成 29 年 12 月 8 日金沢大学から発信）



【インタビュー】

滋賀医科大学は、琵琶湖をとりまく滋賀県に「一県一医大」構想の下、医学部医学科の単科大学として昭和四十九年に開学しました。附属病院の開院や大学院医学系研究科の設置を経て現在に至ります。本学は、地域に支えられ、地域に貢献し、世界に羽ばたく大学として、人々の健康、医療、福祉の向上と発展に貢献する理念のもと発展を続けています。現在、七名の金沢大学十全同窓会員が基礎と臨床の講座で研究、教育、臨床において中心的に活躍しております。ご寄稿していただいた原稿を掲載させていただきます。

一、上島 弘嗣 名誉教授(昭和四十六年卒業) アジア疫学研究センター特任教授

平成二十一年の三月で無事定年となり、以後、特任教授として滋賀医大に現在も勤務している。後任の三浦教授が決まったときには、本当に肩の荷が降りた気がしたものである。現在の私の役割は、大学院生の指導と研究の遂行のみなので、勤務時間は自由にでき、在宅勤務も可能となっている。もちろん、教室、大学等の運営には関わっていない。

さて私も七十四歳を過ぎたが、入学した頃は、自分が高齢になったらどう生きるかなどと考える時が来るとは思っていません。それは、大病を患い、やっと入学した

ので本気でそう思っていた。幸いなことに、現在、妻から高齢者の自立訓練を受けている。料理を初めとした家事指導である。この歳になると、どちらが先にお迎えが来るかわからないのである。お陰で、自分で作れる料理の範囲は随分と増えた。しかも私の料理は特別で、高血圧の食事療法の為に家庭での食事は、食塩を含む一切の調味料を使わない料理である。これを美味しく楽しく食べている。



北海道で釣り上げた鱈はとてつもなくでかかった。

私の趣味は温泉旅行であったが、定年後はそれに釣りが加わった。今では釣り依存症と言っても良い状態である。

二、谷 徹 名誉教授(昭和五十一年卒業) バイオメディカル・イノベーションセンター特任教授



昭和五十一年に金沢大学を卒業後、虎ノ門病院で外科研修を終え、五十五年

滋賀医科大学に赴任、前任の小玉正智教授の第一外科学教室に入局した。平成十三年 三代目の消化器外科教授を拝命した。下部消化管を専門として小玉教授が築かれた外科学講座の体系を整え、消化器全ての手術を受けられるレベルにまで能力を整えた。任期中に手術症例は倍となった。また大学院の時「Toraymyxin」を開発した。現在までに十数万人に使われ、研究会が出来、関連論文は英文三百篇以上、世界、邦文千篇以上となった。二十数年を経て米国FDAに申請されている。平成二十五年外科学講座を退任後は二〇〇〇年から開発を進めてきた次世代手術システムに対し、文科省特別会計予算で臨床用3TMR装置を動物用として設置し、五年間のプロジェクトとして続け、現在に至っている。詳しくは三次元リアルタイムMR画像下に生体内構造を見ながら行う手術システムの開発で、専用手術用にマイクロ波手術機器を開発したが、通常の開腹手術用機器が本年Acrosurg®として製品化された。

今後数年間の内にマイクロ波機器を鏡視下、内視鏡用鉗子、血管内鉗子、ロボットハンド分野への展開、新しい屈曲機構を用いたカテーテルの開発等もすでに進めており、日本発の医療機器開発に貢献

出来ると考えている。金沢大学保健看護学科の前真田教授や田中講師とフラットパネルディテクターの共同研究をさせて頂いている。

三、浅井 徹 教授(昭和六十一年卒業) 外科学講座 心臓血管・呼吸器



金沢大学を昭和六十一年に卒業して第一外科に入局しました。

その後若喬教授の指導のもと学位を取得させていただきました。また、推薦状を書いていただきニューヨーク大学医療センターへ留学し約五年半にわたり、心臓血管手術の経験を積み帰国しました。帰国後は金沢循環器病院に勤務して、当時国内外でも稀な心臓拍動下冠動脈血行再建術オフポンプバイパスを標準術式に確立しました。また人工弁置換術が主流であった弁膜症治療では、自己弁を温存し再建する僧帽弁形成術を多く手がけました。平成十四年に滋賀医科大学外科学講座(旧第二外科)、心臓血管外科・呼吸器外科の教授として赴任しました。赴任当時何とかこの地で全国の施設に負けない心臓血管外科治療をできるようにしたいと思い私を含めて三人のチームで悪戦苦闘しました。その後徐々に、病院スタッフや循環器内科医や麻酔科医のご協力をいただけるようになり、今ではすべての緊急症例、重症症例を決してお断りなくお受けするno refusalの方針で年間四百例近くの心臓胸部大血管手術を毎年若いスタッフ達と行い後進を育てています。滋賀医大発の、新しい術式の開発と検証、



アジア疫学研究センター

国際協力としてベトナム、ホーチミンにJICAが設立したチョーライ病院での毎年の指導交流を行っています。  
 現在では国内外から心臓大血管手術の見学者が滋賀に来られます。新時代の心臓血管治療をこの地でさらに開発してゆくことを楽しみにしています。

**四、三浦 克之 教授(昭和六十三年卒業)**  
**社会医学講座公衆衛生学部門**  
**アジア疫学研究センター長**

当講座の先代の教授である上島弘嗣先生(金沢大学昭和四十六年卒業)に平成二十一年に准教授として滋賀医大に引張っていただいていたから間もなく十年が経とうとしています。翌平成二十一年に幸い後任の教授に就任しました。

当講座は上島先生の代からわが国の循環器疫学研究のメッカであり、NIPPON DATA、INTERMAP、EPOCH-JAPAN

など多彩な疫学研究が遂行されてきました。疫学研究は長期間の追跡を要するところが多く、この貴重な財産を継承して発展させることが私の大きな任務でした。幸い、多くの疫学研究を遂行するための研究棟(最先端研究施設)新築の予算が付き、全国では最初の疫学研究拠点である「アジア疫学研究センター」を平成二十五年に開所し、そのセンター長も務めることになりました(写真)。近隣住民を対象にした滋賀動脈硬化疫学研究(SESSA)では、認知症の疫学研究も開始しました。

また、同年から本センターをベースとする大学院教育を行う博士課程教育リディングプログラム「アジア非感染性疾患(NCD)超克プロジェクト」も採択され、国内外からの多くの博士課程学生がNCD疫学・予防医学を学ぶ場となっています。十全同窓会の若い皆様もぜひ博士課程や内地留学で研究にいらしてください。お待ちしております。

**五、縣 保年 教授(平成二年卒業)**  
**生化学・分子生物学講座**



私は卒業後、京都大学医学部 生化学教室に入學し、本庶 佑先生のもと、DNA遺伝子の分離と抗体

の作製に関わりました。現在では、PDI-抗体はニボルマブとしてたいへん注目されていますが、当時は細胞死関連遺伝子として分離したため、細胞死との関連を示すデータが得られず苦勞しました。むしろ抗原受容体を刺激して活性化すると、

PD-1の発現が誘導されることを見出し、なんとか学位を頂きました。

その後、抗原受容体遺伝子の再構成におけるエピジェネティックな制御について研究を行い、平成二十五年に滋賀医科大学に採用していただきました。着任後は、京都大学の河本 宏先生との共同研究として、iPS細胞に、がんを攻撃できるT細胞受容体遺伝子を導入して、キラーT細胞を効率よく再生する研究も進めています。

私の講座の初代教授、野崎光洋先生は、本庶先生の恩師、早石 修先生の助教でしたが、私が生化学を習った久野 滋先生も、早石研の助教をされており、ご縁を感じています。久野先生の「グライコジェンが〜」、「ホスホフルクトカインースが〜」という、あの独特なお声が今でも耳に残っていますが、まさか自分が生化学を教えることになるとは思っていませんでした。もとより浅学のため、また最近の学生さんの要求は高く、教育に、研究に苦勞している毎日です。

**六、伊藤 英樹 准教授(平成八年卒業)**  
**医療安全管理部**



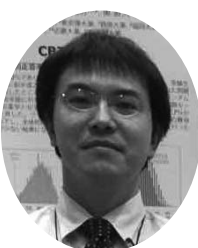
卒業後金沢大学第二内科に入局し、馬淵宏教授、清水賢巳助教授の指導のもと学位を取得

させていただきました。北陸三県の関連病院で諸先輩方から医療に対して真摯で熱意のこもった指導を受けることでチーム医療の精神を学びました。平成十七年の馬淵宏教授の退官時、京

都大学から滋賀医科大学呼吸循環器内科に赴任された堀江稔教授からお声をかけていただく縁があり、地元である滋賀県に帰郷することになりました。平成十八年に呼吸循環器内科の助手となり、大学院生の指導の傍ら、パリ大学へ留学し、サルベトリエールの地で欧州の高名な不整脈医と肩を並べて研究する機会を得ました。帰国後、学内講師として循環器内科病棟医長を務めた際に医療安全の仕事に関わったことが切っ掛けとなり、平成二十八年から医療安全管理部で病院システムに関わる業務に就いておりますが、医学生への教育にも力を入れていっております。

滋賀医大は平成三十年度、日本医療機能評価機構の特定機能病院に対応した機能評価を受けます。日々多忙な職員が院内体制の向上のために意識的に取り組むのはなかなか容易な事ではありません。私はスムーズな病院運営がなされるようにタスクフォースの役割を務めることに励んでまいりたいと思っております。

**七、服部 哲久 特任助教(平成十六年卒業)**  
**臨床教育講座**



私は、現在、滋賀医科大学の臨床教育講座に所属しております。この講座は、医学部学生の学習

支援、カリキュラム改革を中心に活動しております。恥ずかしながら、これまで大学で勤務していても医学教育という分野について意識することがなかったのですが、この講座に配属され、医学教育に正面から取

次頁下段に続く

# 金沢から世界へ発信

## 内分泌・代謝内科学講座

御簾博文 (平成二十一年卒業)

金沢大学大学院医学系内分泌・代謝内科学ならびにシステム生物学(旧第一内科)では、それまで知られていなかった新たな機能を有することが発見された肝臓由来液性因子を「ヘパトカイン」と総称することを提唱し、ヘパトカインの同定ならびに機能解析を精力的に進めてきた。

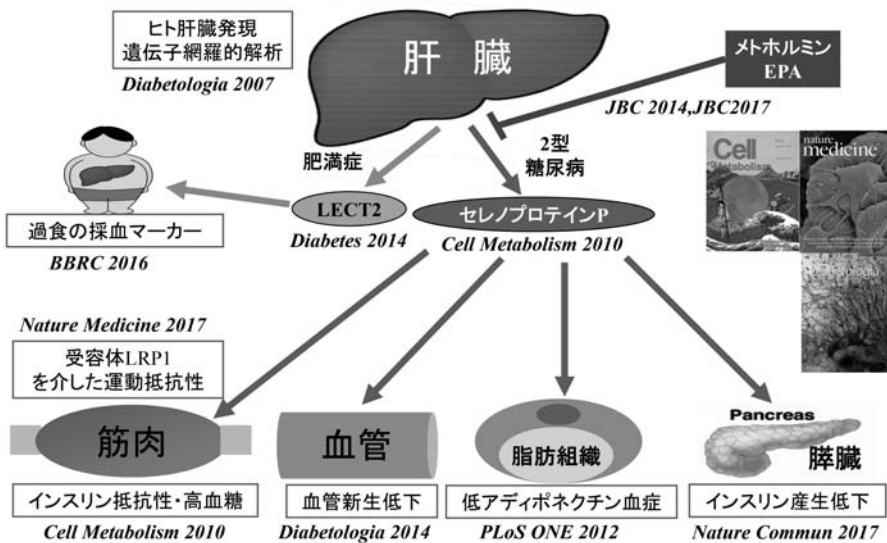
我々はこれまでに、インスリン抵抗性・高血糖を惹起するヘパトカインとしてセレノプロテインD (Ssd) aLECT2を報告してきた。その端緒として、ヘパトカイン研究は、北陸地方在住の2型糖尿病の患者様から肝生検をさせていただくことから始まった。2型糖尿病の患者様の肝臓を対象とした包括的遺伝子解析をおこない、肝遺伝子発現量と臨床パラメーターの比較検討をおこなった (Diabetologia 2007)。その結果、肝臓での遺伝子発現とインスリン抵抗性重症度が正相関する因子としてSsePを、BMIと正相関する因子としてaLECT2を同定した。培養細胞実験および遺伝子欠損マウス実験より、SseP・aLECT2はともにインスリン抵抗性・高血糖を誘導するヘパトカインであることを見出した (Cell Metabolism 2010, Diabetes 2014)。これらの研究によって、ヘパトカインの分泌異常が2型糖尿病の高血糖の原因になること、ヘパトカインが2型糖尿病の治療標的になる可能

性があることを世界で初めて明らかにした。その後我々は、SsePの骨格筋受容体がLRPIであることを、過剰なSsePが筋に作用することで運動をおこなってもその健康増進効果の発現が減弱・消失するという「運動抵抗性」という病態が生じることを培養細胞・マウス・健常被験者を対象にした実験によって明らかにした (Nature Medicine 2017)。さらに最近、SsePが膵β細胞でのインスリン産生を強力に低下させること、SseP中和抗体投与が糖尿病マウスにおいて膵インスリン産生を上昇させることで高血糖を改善させ、aLECT2を見出した (Nature Communications 2017)。

これらの論文は、ヘパトカインSsePの産生阻害薬や作用阻害薬の開発が、「運動効果増強薬」、「膵インスリン産生改善薬」などの夢の創薬につながることを示唆している。

ヘパトカイン研究は、2型糖尿病の患者様の御厚意から始まったものである。いつか2型糖尿病に対する新たな診断・治療法を開発

することで、この御厚意に答えるべく、さらなる実験・研究に邁進している。



り組むようになり、私が金沢大学の学生だった頃と比較して、状況が大きく変容していることを痛感させられました。様々な分野でグローバル化が進行していますが、医学教育にもグローバル化の波が押し寄せています。国際基準に基づいた医学教育プログラム、分野別評価制度の確立が必要になりました。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、平成二十二年に米国医師国家試験受験資格審査NGO団体より、「二〇二三年以降は、国際基準で認定を受けた医学校の出身者にしか、米国医師免許試験 (USMLE) の受験資格を認めない」と通告されました。このことは、「二〇二三年問題」とも言われておりますが、全国医学部長病院長会議において、このグローバル化の流れに対応し、国際的に通用する医師養成制度を確立すべきであると判断されました。そこで、日本の医学教育の質を高め、諸外国と比較しても劣らない医学教育を実施することを目的として、日本医学教育評価機構が設立されました。この機構は、申請のあった大学の医学教育について、分野別にグローバルスタンダードの観点で評価します。滋賀医科大学でも医学教育改革を実施しており、平成二十九年十一月に同機構による審査を受けました。

今後の日本の医療を支える人材を養成するためには、優秀な学生を優れた医師、医学研究者へと育む環境を整備することが必要です。金沢大学には長い歴史があり、優秀な卒業生を多数輩出していることから、金沢大学の医学教育を絶え間なく改革を続ける伝統を感じ、感銘を受けております。

病院紹介

公立羽咋病院

病院概況

当院は昭和九年の伝染病予防組合の設立に始まり、幾度かの変遷を経て、昭和四十二年に一市四町で厚生医療組合の設立により公立羽咋病院と改称されました。その後町村合併により、運営形態は羽咋市・志賀町・宝達志水町の一市二町からなる広域圏事務組合立の病院となりましたが、志賀町、宝達志水町にはそれぞれ町立の病院があり、特異な形態となつています。

当院の診療圏は、総人口約五万四千人、高齢化率約三十七%の地域であり、少子高齢化が急速に進行しています。診療科は十四科で、常勤医師は十六名、このほかに金沢大学・金沢医科大学から非常勤医師の派遣を受けています。現在の病床数は百七十四床で、病棟は三単位で、平成二十六年八月より一病棟を地域包括ケア病棟として運営を開始しています。平成十六年に日本医療機能評価機構の認定病院となり、その後二回の認定更新を行っています。平成二十二年には災害拠点病院として県の認可を受け、DMATチームも認定されました。経営形態は平成二十三年より地方公営企業法全部適用となりました。

病院理念と基本方針

平成十四年に「一人にやさしく、信頼される病院」を病院理念として決定し、こ

の理念実現のための三つの基本方針を定めました。第一に納得のいく医療を提供する、言い換えれば「仁」、すなわち人を愛する精神、第二に地域と連携する「和」の精神、第三に安全で良質な医療を提供するために「知」を求める精神を表し、この「仁、和、知」の精神を大切にするのが、病院理念を実現させる道と考え運営を行っています。地域住民の声を大切に、また、地域における急性期医療を主体に、地域との連携を大切に、チーム医療を推進することにより、二十年以上にわたって健全経営を維持しています。

公立羽咋病院の業務目標の基本は、「やるべき医療、やれる医療、やりたい医療」をすべて実践することです。この実践には働きがいのある職場環境が必要と考え、職員満足度の向上にも努めています。医師事務作業補助員や看護補助者の増員をし、平成十四年に薬剤師を病棟配置し、平成二十六年に管理栄養士を、平成二十九年に一般病棟にも専従の理学療法士を配置し、各職種、職種で壁を作らず、お互いに協力し、時間を効率的に使うことに協力し合っています。これらにより、身近に各専門職がいることで迅速に患者対応ができ、チーム医療を推進しやすい環境ができたこと職員からも好評を得ています。また、平成二十七年よりITを利用した患者離院防止システムを導入するなど、先進的な対応も取り入れ、医療安全と業務改善に努めています。

地域連携への取り組み

地域の病院として、周辺の医療機関との連携、行政との連携、介護などの事業

所との連携が重要と考え、平成十五年に医療サービス推進室を設置しました。診療所からの患者紹介や検査依頼はすべてこの部署で完結し、病院医師への連絡などの院内調整は推進室職員が行い、退院支援の調整も行っています。この部署を窓口にして、地域の医療機関と病院医師の連絡会のほか、一市二町の行政・福祉保健職員との連絡会、介護事業所職員との連絡会を定期的に開催し、医療知識や問題点の共有化を図っています。行政との連絡会では地域包括ケアシステムの構築に向けた連携の話し合いも行い、病院と地域の接点として日々活動を行っており、地域の皆様から最も顔の見える部門として高い評価を得ています。

平成二十八年度に策定した新公立病院改革プランでは、一般急性期と回復期機能を選択し、地域包括ケア病棟が退院支援など回復期機能を担う病棟と位置づけ運営を行っています。

今後の課題

地方においては医師の高齢化や医療資源の不足が大きな問題となつていますが、当院においても最重要課題です。医師の派遣を大学病院に依存しており、当院ができる対策として大学病院の研修制度への協力を積極的に行つていかなければならないと考えています。また、新人教育制度の充実や、看護師・薬剤師に対する奨学金制度、処遇改善などにも取り組んでいます。「やるべき医療、やれる医療、やりたい医療」を、基本方針に従って実践することが、病院理念「一人にやさしく、信頼される病院」の実現をもたらすと考え、職員一同、豊かで健やかな地

域社会実現に向けて今後も努力し、協働してまいります。  
十全同窓会の会員の皆様方には、これまで同様、ご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願い致します。  
(病院事業管理者兼病院長  
松下 栄紀 記)



## 病院紹介

### 富山県立中央病院

富山県立中央病院は、昭和二十六年四月一日に不二越病院を県に移管し改称して設立されました。今年が開設六十七年目に当たります。「県民に良質な安全な医療を提供し、県内の医療機関等との連携を図り、地域社会に貢献する」ことを病院の理念とし、「やさしさを感じる医療、信頼できる医療、安心できる医療」をモットーに、全国トップクラスの病院を目指しています。

#### 病院設立までの歴史

前身の不二越病院は、昭和十五年四月二十一日に不二越鋼材工業株式会社（現株式会社不二越）内の診療所を拡充して従業員とその家族のために開設されたもので、これが当院の源流といえます。後に当院初代院長となる多賀一郎先生が金沢医科大学谷野内科から院長として着任されています。その当時、軍事需要の増大で不二越鋼材工業の従業員とその家族を合わせると約八万人で、それに見合う規模の病院建設が計画されました。昭和十七年十一月一日現在地に北陸では金沢医科大学を除いては類を見ない大病院が、九診療科、百五十一床、医師十七名、看護婦百名で開設されました。昭和二十八年八月一日、二日の富山大空襲によって、市街全域が焦土と化し、市内の医療機関が壊滅状態となった中、奇跡的に不二越病院だけが戦災を免れ、多賀院長の英断で全館を開放し、大量の診療材料を

戦傷者のために投げうったそうです。これを機に、不二越病院は一般市民へのオープン制となり、一企業病院から地域の基幹病院としてその役割を移行していききました。

戦後、我国の保険医療行政は進駐軍の指導監督下にありましたが、昭和二十二年に日本政府による医療制度審議会が設けられて「公的医療機関の経営の主体は原則として都道府県等の地方公共団体とする」とされ、昭和二十五年二月の「医療機関整備計画」の中で「都道府県立を中心とする公的医療機関を整備し、都道府県ごとに中央病院、地方病院および地区病院を設け、体系化する」とされました。このような中で富山県も検討を進めていきましたが、当時富山市内には前述のような条件を満たす公立医療機関はなく、終戦による不二越鋼材工業の経営状況の悪化などもあったようですが、県当局に不二越病院の移管を打診されたようです。県では、中央病院新設には莫大な費用と時間を要すること、不二越病院が中央病院としての十分な機能と規模を備えていたこと、などから移管を決定し、昭和二十六年四月一日富山県立中央病院として開院しました。開院時には、九診療科（内科、外科、小児科、産婦人科、皮膚泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、理学診療科、歯科）、病床数二百五十五床、職員数百九十三名（医師二十三名、歯科医師二名、看護婦六十八名、薬剤師五名、その他九十五名）で、多賀一郎先生が初代院長でした。その後、診療科や諸部門の増設・拡充が行われ、建物も増改築され現在に至っています。

#### 病院の概要

当院は富山県で唯一の県立総合病院で、基幹・中核病院として高度急性期・急性期医療はもとより、政策医療においても重要な役割・機能を担っています。二十二診療科で、病床数は七百三十三床、常勤医師数は、臨床研修医三十七名を含めて二百十四名です（平成二十九年四月時点）。DPCII群病院で七対一看護体制をとり、地域医療支援病院、都道府県がん診療連携拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院、基幹災害拠点病院、第一種感染症指定医療機関、臨床研修病院、また各種学会の専門医・認定医制度教育研修施設となっています。さらに、三次救急を担う救命救急センターを有し、平成

二十七年から富山県のドクターヘリ基地病院に指定されています。また、総合周産期母子医療センターとして、MEICC六床、ZCC九床を有し、精神科医療では救急・急性期や合併症の治療を担っておりです。

平成二十八年度の実績では、入院患者延数二十一万五千九百四十八人（五百九十二人／日）、外来患者延数三十五万四千七百六十一人（千四百六十八人／日）、病床利用率八〇・七％、平均在院日数一〇・三日（一般病床）、総手術件数七千二百三十五件（全麻手術四千五百四十七件、鏡視下手術千五百四十二件、緊急手術八百一十一件）、救急車搬送件数五千八百八十件、ドクターヘリ出動件数七百三十件でした。

**先端医療棟開設をはじめとした高度急性期医療の充実、人材育成の強化**

平成二十八年九月がん診療と救急医療などのさらなる充実を図るため「先端医

療棟」を開設しました。一階は「高度画像診断センター」、二階は「内視鏡センター」、三階は一般病院では北陸初となる、特定集中治療室（スーパーICU）を備えた「高度集中治療センター」、四階はロボット手術やハイブリッド手術にも対応した「低侵襲手術センター」をそれぞれ設置しました。国内最高水準、最先端の治療が可能になったほか、救命救急医療も一層充実させることができました。それに続いて行った既存棟の改修により、入院支援センター、がん化学療法通院治療センター、緩和ケアセンター、在宅療養支援室などを整備・拡充し、地域の医療機関との連携やがん治療の一層の強化・充実を図っています。

また、平成二十八年度には卒後臨床研修評価機構（JCEP）の認定病院となつたほか、平成三十年度から実施される新専門医制度に対応して、内科、外科、産婦人科、小児科、整形外科、救急科の基幹型専門研修プログラムを作成しました。

わが国の医療を取り巻く環境は、人口減少と超高齢化の進展、医療費の増大など様々な問題を抱え、大変厳しい状況にあり当院もその例外ではありません。地域医療構想や新公立病院改革プランを踏まえた適切な対応が求められております。高度急性期医療を担う中で、地域医療機関との連携強化を一層進めていかなくてはなりません。十全同窓会の皆様には今後ともご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

（病院長 清水 康一 記）

## 教室だより

### 再生分子医学研究分野 (旧分子病態医学)

**沿革** 平成十年、金沢大学大学院医学研究科・分子情報医学系専攻・分子病態医学講座として発足しました(初代講座主任・中西功夫教授)。その後、平成十三年に横田崇教授が第二世代教授として就任しました。同年には、博士課程の部局化に伴う改組によって、金沢大学大学院医学系研究科・がん医科学専攻・機能再生学講座・再生分子医学研究分野となり、さらに、平成二十年に医薬保健研究領域医学系と改組されました。現在、分野スタッフとしては教授一名、准教授一名、助教一名、事務補佐員一名、協力研究員一名が、また学生としては博士課程大学院生一名、MRTプログラム医学類生六名が在籍しております。

**教育** 大学院博士課程では、医薬保健学総合研究科の「基礎系領域融合セミナー」「最新医科学英語」、並びに先進予防医学研究科の「環境と遺伝」の講義を分担しています。専攻共通科目のうち「先端医科学セミナー」として、所属の大学院生を日本生化学会や日本分子生物学会に参加させ、研究内容を発表させています。専攻研究分野開設科目としては、博士論文の研究指導に加え、「再生分子医学特論」として毎週金曜日の午後に行う研究の進行状況の報告会を行っています。また「幹細胞生物学セミナー」として、学外講師を招いたセミナーの開催や、最新の英語論文を読んで解説を加える抄読会も月に一回行っています。

ます。修士課程では、選択科目として「再生分子医学」の講義を担当しています。また「医科学研究特論」として、修士論文の研究指導を行ない、「医科学方法論演習」として、上記の研究報告会ならびに抄読会を行っています。医学類では、一年生の「医薬保健学基礎」「初學者ゼミ」「初學者ゼミII」「大学・社会生活論」、および二年生の「動物実験と再生医学」の講義を分担しています。また三年生の「基本的基礎配属」を担当し、六年生の「応用基礎配属」を分担しています。これに加え、希望する医学類生についてはMRTプログラムに登録し、研究室メンバーとして研究活動に参加してもらい、より専門的な教育を実施しています。

**研究** 当研究分野では胚性幹細胞(ES細胞)に着目し、ES細胞の自己複製能、多分化能、増殖能の制御機構の解明を目指しています。ES細胞は胚盤胞の内部細胞塊から樹立された細胞株で、体内の様々な細胞へと分化できる能力(多能性)を持つていることから、再生医学の分野において大変注目を集めています。ES細胞の多能性を維持させたまま増殖(自己複製)させるためには、白血球阻害因子(LIF)と呼ばれるサイトカインを

培地に添加することが必要です。ES細胞をLIFで刺激することで、転写因子であるSTAT3やOct3/4などが機能しています。私たちの研究室では、STAT3の下流遺伝子やOct3/4の下流遺伝子・相互作用因子を解明することで、ES細胞の自己複製制御機構の解明に取り組んでいます。ここでは、私たちが明らかにした最近の知見をご紹介します。

クロマチンリモデリング複合体であるBat複合体は、細胞の生命活動の様々な局面で重要な役割を担っています。ES細胞には、ES細胞特異的なesBat複合体が存在し、Bat53aはesBat複合体の構成因子の一つです。私たちがBat53aノックアウトES細胞を樹立し解析した結果、Bat53a遺伝子破壊に伴いES細胞の増殖能が急激に低下することを見出しました。その分子機構を解析したところ、Bat53aの発現停止に伴い、がん抑制遺伝子p53およびその標的遺伝子p21の発現が上昇することを明らかにしました。

細胞分化などへの関与が知られていますが、私たちがGABPaノックアウトES細胞を樹立し解析したところ、GABPaの発現を人為的に停止させると、ES細胞のG1期停止が起り、増殖が抑制されることを見出しました。これに伴い、p53、p21、Mdm2などの発現上昇と、Cyclin D1/D2、E1/E2の発現抑制が起り、細胞死が観察されました。さらに、p53の機能をRNAiや特異的阻害剤で抑制すると、GABPaの発現停止に伴う細胞死が抑制されることを明らかにしました。このことから、GABPaもまたp53の機能を抑制し、ES細胞の特長の一つである短いG1期の制御および生存に関与していることを明らかにしました。

また、細胞死を誘導するcaspase 3の活性化も認められました。このことから、Bat53aはp53の機能を抑制することで、ES細胞の生存を促進することを明らかにしました。

細胞分化などへの関与が知られていますが、私たちがGABPaノックアウトES細胞を樹立し解析したところ、GABPaの発現を人為的に停止させると、ES細胞のG1期停止が起り、増殖が抑制されることを見出しました。これに伴い、p53、p21、Mdm2などの発現上昇と、Cyclin D1/D2、E1/E2の発現抑制が起り、細胞死が観察されました。さらに、p53の機能をRNAiや特異的阻害剤で抑制すると、GABPaの発現停止に伴う細胞死が抑制されることを明らかにしました。このことから、GABPaもまたp53の機能を抑制し、ES細胞の特長の一つである短いG1期の制御および生存に関与していることを明らかにしました。

およびその標的遺伝子p21の発現が上昇することを明らかにしました。

また、過去に在籍して頂いたスタッフメンバの皆様には、ご自身の研究に加え、教育活動にもご尽力頂き心より感謝申し上げます。学内・学外の共同研究者の皆様には、いつもお力添えや的確なご助言を頂いておりますこと深く御礼申し上げます。最近では学類生の若人たちが、基礎医学研究に興味を抱き、積極的に研究活動に参加してくれることを嬉しく思っています。十全同窓会の諸先生方におかれましては、引き続きのご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



「ES細胞における転写因子GABPaの機能解析」

ETSファミリーに属する転写因子GABPaは、細胞周期、細胞死、

(赤木 紀之 記)

## 教室だより

## 血液・呼吸器内科

当教室は、昭和四十四年に内科学第三講座(病院の診療科は第三内科)として開講しました。その後大学院の名称は細胞移植学、血液・呼吸器内科、と移り変わりました。後に登場した名称は略称しにくく、発しやすいのは三内(さんない)であり現在でもその響きが馴染んでいます。血液内科もしくは呼吸器内科を専門としていますが、自身の領域に関係なく自由な雰囲気の中でディスカッションが行われています。

血液・移植グループは、昭和五十三年に本邦初の急性リンパ性白血病に対する同種骨髄移植成功症例を報告して以来、「造血幹細胞移植による難治性血液疾患の治療」において、中尾眞二教授(血液内科科長)と近藤恭夫講師(血液内科副科長)の指導の下、最先端の治療を行っています。また造血細胞移植センター副センター長の石山謙講師(病棟医長)は、診療科・部門の垣根を越えた「移植多職種カンファレンス」や「移植後長期フォローアップ外来」の指導的役割を果たしています。中尾眞二教授は「再生不良性貧血の病態解明」をテーマに、大学院生など若手研究者を指導しています。当教室で開発された「高感度フローサイトメトリーを用いた発作性夜間ヘモグロビン尿症(PNH)型血球の検出法」は、骨髄不全における免疫病態の関与を診断するための最も信頼できる方法で、全国の日常臨床の現場で定着しています。また、再生不良性貧血患

者の造血幹細胞では6番染色体短腕ヘテロ接合性消失や体細胞変異によるHLAアレル欠失が生じることによりHLAが提示する抗原に特異的なT細胞の攻撃を免れる、というエスケープ現象を発見し、臨床検査としての実用化を目指しています。山崎宏人准教授(附属病院輸血部長)は、再生不良性貧血に対する抗ヒト胸腺グロブリンの適切な投与量を検討する多施設共同臨床試験を主導しています。高松博幸講師は、NGSを用いた多発性骨髄腫微小残存病変評価法による精度の高い予後予測法を提唱し、その臨床研究を主導しています。大畑欣也助教は、日本人白血病研究グループ(ALSC)や日本細胞移植研究会(JSCIT)との臨床研究推進を担当しています。細川晃平助教は、米国立衛生研究所(NIH)での留学を終え、骨髄不全症の発症機序に関わる研究を行っています。

血栓・止血研究室は、先代の松田保名誉教授が研究の基盤を作られた時から、一貫して「血栓症の克服」に向けた臨床・研究・教育を進めています。播種性血管内凝固症候群(DIC)の病態解明、血栓性疾患の病態解明、凝固異常症の遺伝子解析は、当研究室が長年にわたり力を入れています。朝倉英策准教授(高密度無菌治療部副部長)は、DICの病型分類(線溶抑制型と線溶亢進型)を提唱し、同疾患の病態理解に大きく貢献してきました。また三十年以上使用されてきた旧厚生省DIC診断基準が、平成二十九年に新DIC診断基準に改訂されました。朝倉准教授は、「DIC診断基準作成委員会」の委員長として中心的な役割を果たしました。森下英理子教授(保健学科)は先天性凝固症候群の遺伝子解析を専門

としております。全国から様々な凝固阻止因子欠乏症の遺伝子解析依頼を受けています。また抗リン脂質抗体症候群(APS)の病態解明や抗リン脂質抗体測定に広がる血管を研究の対象としていることから、血管外科やその他の診療科・研究室との間で横断的な臨床・研究を進めています。

呼吸器グループは、肺癌・気道疾患・間質性肺疾患の研究を行っています。笠原寿郎准教授(呼吸器内科科長)と曾根崇特任准教授(地域連携呼吸器症候群講座)が中心となり、本邦で行われる進



行期非小細胞肺癌患者を対象とした大規模臨床試験の約半数に参加し、先端医療開発センターのご協力をいただきました。木村英晴助教(医局長)は、血漿中微量DNAを用いた癌関連遺伝子解析を行っています。当グループでは血中遊離DNAを安定して抽出できる方法を確立しており、その方法は当院呼吸器外科や他大との共同研究に用いられています。原丈介助教(外来医長)と大倉徳幸助教は、呼吸凝縮液中の脂質メディアーターを網羅的に解析する方法を用いて、慢性咳嗽患者の病態や重症化に関わる新規のバイオマーカーを探索しています。また、難治性気管支喘息患者に対する気管支温熱形成術(気管支サーモプラasty)を行っています。当院教室では北陸内で最も多くの症例に施術しており、遠方からの紹介も受けています。渡辺知志(留学中)は、同種造血幹細胞移植後にみられる閉塞性細気管支炎に骨髄由来の間葉系細胞が強く関与し、同細胞に発現する増殖因子受容体を阻害することで進行を抑制できることを見出しました。この研究テーマは、血液内科と呼吸器内科のそれぞれの問題点を共有することにより生まれてきたものであり、当教室ならではの成果です。

当教室は、「成果が臨床に還元できるような臨床に近い研究」をモットーに、世界を視野に入れた研究に取り組んでまいりました。金沢大学の他の二つの伝統ある内科学教室と比べますとまだまだ「若い」教室ではありますが、我々の取り組みが血液および呼吸器領域の難治性疾患の克服に少しでも役立つことができるよう、医局員一同努力してまいります。



## 神奈川支部

平成二十九年七月二日、中村信一金沢大  
学十全同窓会会長をお迎えし、横浜駅前の  
横浜ベイシエラトンホテル&タワーズにて  
十全同窓会神奈川支部総会が開催されまし  
た。当支部会は長く東京、埼玉支部会と合  
同で開催されておりましたが、東京まで出  
向くのが大変であるとお声を頂戴し、昨  
年に引き続き横浜での開催となりました。  
最初に島利夫支部長（昭和四十二年卒業）  
より、昭和二十四年、新制金沢大学発祥と、  
金沢大学校歌誕生についての話がありまし  
た。伊藤忠弘先生（昭和四十三年卒業）の



指揮のもと、金沢大学校歌が斉唱されまし  
た。島利夫支部長の勇退に伴い、若杉春江  
新支部長（昭和四十七年卒業）が選出され  
ました。引き続き中村信一金沢大  
より、「医学部の近況」と題してご講演をい  
ただきました。北陸はもとより、国家的事  
業への参画、国際的な人材育成など金沢大  
学で取り組まれている事業について紹介さ  
れ、参加者一同奮い立たされる思いが致しま  
した。また、宝町キャンパスの新しい大学病  
院、医学類校舎についても紹介されました。

懇親会では、各年代の代表の先生より  
近況報告がありました。久々の同窓会での  
の再会を相親しみ、また学生時代に中村  
信一先生から直接ご指導いただいた参加  
者も数多く、盛況のうちに閉会となりま  
した。また、より若い世代の参加を期待し、  
川口雅彦先生（平成五年卒業）、島浩史（平  
成十二年卒業）が新たに神奈川支部幹事  
となりました。今回は県内の約三〇〇名  
の支部会員の先生に案内状をお送りし、  
三十九名にご参加いただきました。今回  
ご参加いただけなかった先生方も、次回  
以後お誘いあわせの上にご参加いただけま  
したら幸いです。（島 浩史 記）

## 静岡支部

今年の十全同窓会静岡支部総会は、九  
月十六日浜松市のホテルオークラ浜松で開  
催された。当日は台風十八号が九州に接  
近中という足元の悪い中にもかかわらず、  
県内各地から二十名の先生方が参集した。  
そして本部からは、以前当地の浜松医大に  
在籍し、浜松を第二の故郷とおっしゃる精  
神・神経科の三邊 義雄教授をお招きし、  
母校の発展の様子や自閉症スペクトラムに  
関する診療の進歩についてご講演頂いた。



若年層を中心に百人には一人はかかるとい  
う身近な疾病だけに、会員からも活発な  
質疑が行われた。その後懇親会に移り、美  
酒に酔いしれながら青春時代を過ごした金  
沢での懐かしい思い出話を花を咲かせた。  
今年の支部総会には、初参加の先生が四名  
おられたが、皆口を揃えて、「県内で活躍  
している同窓の先生方とお会いでき、大変  
有意義な時間を過ごすことができた。」と  
感謝の言葉を頂いた。青春時代を歴史と  
文化の融合する街金沢で過ごしたという共  
通の思い出を有する金沢大学同窓生なら  
ではの感想と思われ、改めて連帯感を強め  
ることができたのではないかと考えてい  
る。現在、静岡県内には百十名を超す会

員が在任しているが、毎年二十名の参加を  
得るのがなかなか難しい現状になっている  
が、医局の同門会とは一味違う同窓生の集  
いに、このような青春時代の良き思い出を  
抱きながらご参集いただければ、本会は  
益々盛大なるものと確信している。

来年は、東部の加藤 政利先生の幹事  
で静岡市にて開催されることが決まり、  
ホテル三十階のバーで水割りを堪能した  
あと散会となった。（岡井 高 記）

出席者（敬称略、向かって左から）金田武志、藤田  
倫匡、佐野勉、杉山晴敏、石神直之、加藤裕之  
鏡周治、土屋和弘、大場範行、加藤政利、玉腰裕規、  
東茂樹、森論史、三邊義雄教授、西村隆、深澤洋幸、  
岡井高、岩瀬敏樹、白井滋、池谷直樹、内藤健助

## 埼玉支部

はじめに、平成二十九年度の埼玉支部総会は、  
金沢本部から横山茂十全同窓会報副編集長  
をお招きして、十月二十一日に開催しまし  
た。また今年より埼玉の副支部長に就任し  
た記念に、埼玉医大国際医療センター核医  
学教授の久慈一英先生の学術講演を拝聴し  
ました。さらに今回はユニークな特別企画  
で、金沢城内キャンパスを出入りする門の  
研究を、埼玉医大名誉教授・医学教育セン  
ター顧問の宮前達也先生から聞きました。  
総会・今回の大学教官に就任は、平成十一  
年卒業松原三郎先生が、埼玉医大総合医療  
センター消化器・肝臓内科准教授で来られ  
ました。昭和五十六年卒業失作直樹先生は、  
九月から川越市に在る東京国際大学の特任  
教授として、主にスポーツ医学科学関連分野  
を担当されております。台風が近づくと悪天  
候で参加者の集まりが遅延して、数名の先  
生方が当日欠場となったのは残念でしたが、  
例年の如くクレイジーに盛り上げました。

学術講演…久慈一英先生の講演「埼玉医大

国際医療センターにおける核医学研究  
 低酸素PET、定量PET、エストロジェン受容体など」は盛り沢山の内容で、筆者の覚えている一部のみを紹介しします。骨の定量SPECTにおいては、骨転移部位のSUVは百を超えるのに対し、生理的な骨の成長による骨端線の集積増加のSUVはせいぜい二十〜三十程度で、以前までの定性画像と違い、集積の強さが定量可能になりました。エストロジェン受容体では、座長の埼玉医大総合医療センタープレストケア科教授の矢形寛先生が、婦人科的なホルモン遺伝子異常研究に造詣が深く、二人の能書きは非常に盛り上がりました。

**特別講演**：埼玉支部は学問熱心な先生方が多く、母校の近況報告に加えて、横山茂先生の研究の話も聞きたいとの要望が有りました。彼は純粋な基礎医学の研究者でしたが、今の部局の教授に就任されてからは、小児の脳や心の発達に関する臨床に繋がる研究もされています。今回は同期生で、さいたま市保健福祉局副理事の黒田安計先生の座長で、「オキシトシンによる社会性行動制御からみた自閉スペクトラム症」という演題を拝聴しました。自閉症や発達障害は何も知らない筆者ですが、受容体には非常に興味があり、例えば注意欠如・多動性障害(AD/HD)において、前頭前皮質のα2A受容体アゴニスト刺激による下行性交感神経抑制作用からの鎮静効果を、たまたま最近勉強しておりました。それ以外の脳神経の基礎や精神科の臨床が専門外の筆者は、高度な内容に目や耳から煙を出し捲っておりました。

石引飲食店街の総てに精通する横山先生ですが、その四十年間の変遷について、最後に動画を見せて戴きました。店の場所および店主ともに不変で、長年頑固に健闘した代表格は「眠来」でしょうか。



実はその主人と筆者は、研究熱心・仕事のせつかさ・スポーツマン・ギャンブル気違い・クレイジーな酒と、同じ生き方を四十年以上続けた盟友です(汗)。

**特別企画**：金沢大学医学部六十年以上の歴史を知る宮前達也先生が、以前の城内キャンプスを出入りする門についてレポートされました。我々がずっと知らなかった門も含めて、六〜七箇所も在るそうです。二〇一八年春には更に詳細な調査をされるそうで、いずれは十全同窓会報に寄稿して戴く予定です。**懇親会**：横山先生の石引飲食店街の動画鑑賞から、既に喉を潤しておりましたが、能登沖の離島などの僻地医療にも熱心な山藤和夫先生の言葉で、改めて乾杯しました。今回は良く冷えた「八海山」のデカンターが好評で、歓談は滅茶苦茶盛り上がりました。呑みすぎて途中退場する人も

居り、終了後の集合写真には参加者の半分しか残らず、幹事の不覚でありました。参加者(敬称略)：宮前達也、山藤和夫、松田博史、川内淳子、川勝樹夫、瀬戸幹人、黒田安計、堺堀洋治、竹田洋介、横山茂、松成一朗、野村将春、北野善郎、加藤直子、久慈一英、矢形寛、長田久人、市川聡裕、岩根弘明、河野正志、守谷研二、松原三郎、塚本博和、原祐樹、以上です。(瀬戸 幹人 記)

## 京都支部

十月二十八日(土)、京都ホテルオークラにて夕方六時から開催しました。今回は本部から中村信一会長をお招きし、金沢大学医学部の近況と、特別にお願いして、「腸内細菌、腸・脳関連」について講演していただきました。腸内細菌はいま第六の臓器として研究が進み、新しい知見がどんどん出てきています。人体に生息する細菌の数は人間を構成している細胞数の何十倍もあり、すべての細菌が、病細菌の黄色ブドウ球菌を含めて、人間にとって何らかの役目をもっている可能性や、先生が以前考えておられた自閉症と腸内細菌とのかわりが今注目されていることなど熱く語ってください。先生の細菌への深い愛情を感じました。

また、今回は文化庁京都移転の総括者で、文化庁地域文化創生本部事務局長の松坂浩史様にも特別参加してもらいました。松坂様は中村会長が金沢大学の副学長の時に、大学の法人化に向けて金沢大学総務課長として尽力された方です。このように、今回は幅広い内容なので夫婦同伴でお誘いしました。松坂様は気さくな人柄のよい方で周囲の席の人たちと歓談しておられ、また、官僚として法律面にも詳しい方だと感じました。京都市民として心強く感じました。



昭和二十九年卒業の中村晋先生は今日本医師会雑誌の毎月のテーマごとの論文を読んで、後ろの問題集の回答を医師会に送っておられるそうです。医学に対する情熱に圧倒されます。昭和三十五年卒業の松山均先生は歩きにくくなっておられるのに、奥様に支えられて出席してくださいました。今も奥様とご一緒に併けに精進しておられます。昭和三十八卒業の松本由朗先生は僕の同級生で毎年参加してもらっています。昭和四十一年卒業の若泉悟先生は馬術部で松本君の後輩です。今は、診療は息子さんに譲ってゴルフ三昧です。桑原正喜先生は京都府南部の岡本記念病院で呼吸器外科医として後進の指導に当たっておられます。昭和五十三年卒業の小野聡先生は京都支部の幹事として今年で十年お世話してもらった

ています。奥様も金沢大学文学部出身で一緒にご尽力いただいています。同級生の辻和夫先生は京都支部のブレンです。この先生と小野先生夫妻で京都支部は持つています。昭和五十七年卒業の今井博之先生も小野先生がさそってくださって、幹事の中に加わっていらっしゃいます。力強いです。昭和五十八年卒業の布施春樹先生は舞鶴共済病院の院長で多忙な中を遠方から来ていただきました。金沢大学からの医師の派遣がなくて困ってられます。中村信一先生にもお願いしておられました。布施先生は泌尿器科医で、大学での研究時代に細菌の研究で中村先生の指導を受けられ、学位論文の副査も務めていただいたと、今日の再会を楽しみに出席されました。布施先生と同級の三木秀樹先生は現在京都府医師会理事を五期目で精神科領域の貴重な存在です。平成二年卒業の石井久成先生は今年初参加です。学生時代、中村先生に授業を受けた時のことをエピソードを交えながら、懐かしそうに話していました。また、中村先生のお宅まで七、八人で押しかけて行ったことなど、中村先生も楽しそうでした。これぞ同窓会です。(八田 一郎 記)

### 岡山支部会

平成二十九年金沢大学十全同窓会岡山支部会が十一月二十五日(土)、メルパルク岡山において盛大に開催されました。岡山支部では毎年この時期に同窓会を開催させていただいております。今回はほぼ毎年出席されている先生方に加え、筆者の同級生で平成八年卒業の羽藤泰三先生が初参加されました。羽藤先生は約十六年間金沢大学整形外科の関連病院で勤務された後医局人事を離れ、地元



の愛媛県今治市に戻り今回が初参加でした。その他参加者は卒業年度順に昭和五十年卒業 山形専先生、昭和五十一年卒業 寺沢明夫先生、平成八年卒業 浅海浩二(筆者 岡山支部長)、平成九年卒業 高木徹先生、平成九年卒業 杉本太郎先生、平成十一年卒業 西川敏雄先生、平成十二年卒業 梅原憲史先生、平成十二年卒業 門田弘明先生、平成十二年卒業 横溝智先生、平成十三年卒業 杉山成史先生の十一名でした。

美味しいお酒と料理をいただきながら、学生時代に戻ったように金沢での懐かしい話で盛り上がり、あつという間に時間が過ぎていきました。また来年もお会いできることを約束して、会を終了させていただきました。今回も幹事の杉山先生に大変お世話に

なり無事に会を終えることができました。来年度も早めに声をかけて参加者を増やし金沢から遠く離れた岡山での金沢大学出身者の繋がりを深めてまいりたいと思います。(浅海 浩二 記)

### クラス会

### 昭和三十四年卒業

平成二十九年十月二十一日(土)、大宮の中華料理店東天紅で開催され、十四名



### 三十六同窓会

平成二十九年十一月二十五日(土)午後六時三十分より、三十六同窓会(金沢大学医学部昭和三十六年卒業)を山乃尾にて開催した。

今年卒業後五十七年目で、全員が八十歳を過ぎての同窓会となったが、参加者は十八名(奥様方六名をプラス)であった。

幹事の力丸先生の司会で、前回の会以後に失った三人の畏友に対してまず黙祷を行った後、宴会に入った。

最初、久しぶりだ…という緊張感で始まったが、数分後には、もう昔と変わりのない仲間の会になってしまった。

一入二分程度の「近況報告Ⅰα」の話が回されたが、懐かしい昔の話(恩師、試験、遊び、泉学寮く仕事等々)も加わってきて、段々、誰も遠慮なしの会になっていった。奥様方の方も、元々この会を通じて親しみを深めておられ、話は弾んでいるようであった。体調・老化(耳が多い)を意識しての、仕事は次世代に託する話など…皆の身にまつまされる話もあったが、反対に晴耕雨読に転向し(も加えて)もつと元気にやっているぞ…との力強い頼もしい話も聞こえてきた。今後のこの同窓会の運営の話が出た。



この楽しい会は必ず続けていこうという意見以外に話はでなかったが、次回の会期・場所は決められなかった。

入学時からの紅一点の山内（藤井）玲子さんの元氣は確認できたが、返信の得られなかった十二名（大半の元氣は確認されているが...）という未確認問題もある。

平成二十六年の卒業後五十年の記念のかなり以前から平成二十七年までは、出席者が少なくとも毎年同窓会を開いてきた会（昨年だけ、同窓会がでず）である。今後は小規模でもっと気楽な会となっても、毎年（あるいは回数は減って

も）、同窓会は続けたいというのが出席者の総意であったと思う。

とりあえず、次回からの開催は北陸（金沢・富山）で毎年か隔年の開催を目的に努力することとした。

出席者：岩本実、小林勉夫妻、坂井修郎、佐原吉博夫妻、中川正明夫妻、浜中雄二夫妻、星野元昭、向平淳、柳川洋、大家他喜雄夫妻、山本鉄郎夫妻、力丸修夫妻（大家 他喜雄 記）

### 三八会

十月十三日に京都在住の松本君と八田一郎の両夫妻がお世話して、京都ホテルオークラで開催しました。夫婦同伴者が十二人、単身が六人の合計三十人が集まりました。

会のはじめに三人の冥福を祈って黙祷を捧げました。久江清一君は一昨年に亡くなっていました。遅まきながらの黙祷でした。今年の八月に中川正昭君が、また、出席を楽しみにしていた石川光賢君がこの会の少し前に天に帰っていきました。八十人のクラスの三十人が既に天上の人となり、淋しさを覚えます。

さて、懇親会は昔みたいに舞妓さんをおんたりとか、そんな華やかなものではなくても、自己紹介や談笑のうちに和やかに三時間近くを過ごしました。同級生同士の飯田夫妻は、陽二君は自宅でのんびりと、恭子さんは魚津で高齢者の活性化を目指して地域のお年寄りが集える「つむぎ」を立ち上げ、無償で心温かく奉仕しています。石川高嶺君はフランス語が得意で精神鑑定の折、フランス人も担当するそうです。フランス大好き人間です。また亡くなった石川光賢君のことを思い出して、授業をさぼって一緒に麻雀をしていたことなど話していました。一前東亜子さんも同じグルッペだっ

た光賢君のことを残念がっていました。石崎宏夫妻は夫がせつせと耕し野菜をいっぱい育て、奥さんが方々に届けておられます。

僕のところにも年数回、見たことがない珍しいイモやいろいろなものが届きます。奥様が大変です。一前東亜子さんと武田博子さんはささいい合わせて毎年参加します。亀田健一君は老健施設長として忙しさに悲鳴を上げながら頑張っています。現在、三八会の幹事長としてお世話してもらっています。高橋一郎君は老人介護施設を持った医療機関で長として、二十四時間オンコールの携帯をもつて若い人顔負けの奮闘ぶりです。昨年は片山津近辺を案内してもらいました。北前船全盛の時の豪邸や日本海眺望の場所にも連れて行ってもらいました。

鍛冶友昭君は高岡で老人会のお世話をしながら、写真を楽しんでいきます。倉塚均君は老健施設長を務めています。出雲からの毎年参加です。竹越襄君は金沢医大理事長退任後もまだまだ忙しそうです。土田豊君は夫婦でゴルフに精を出しています。エイジシュートとやらを今年は何回やったとか鼻高々です。寺村能実君は介護施設やリハビリ施設の経営者として、秋田

県の花火で有名な大仙市で活躍しています。中村暁君は医院を息子に任せ写真三昧です。中西功夫君は同級生の蓮村靖君や中川君と楽しくゴルフを楽しんでいます。その中川君が亡くなって本当に淋しいと残念がっていました。また、学生時代サッカー部で活躍していた中川君のショットが素晴らしかったと竹越君もなつかしがっていました。橋本勉君は全国方々検診に出かけて頑張っています。福田孜君は公職を退いた後、富山のサッカーチームの世話やお孫さんのお相手にと奮闘しています。来年

は土田君と一緒に富山勢が三八会をやってくれることになりました。松本由朗君は今度は池波正太郎にとりつかれています。僕、八田一郎は両膝の人工関節置換術後歩けるようになり、両眼の白内障の手術で文庫本の細かな字も読めるようになり、描いている絵にも力が入ってきました。有難いこと



です。

三八会は天に帰った友も一緒になつての暖かな会です。来年も続けられそうでありがたいことです。(八田 一郎 記)

### 四度目の同窓会 (昭和五十八年卒業)

昭和五十八年金沢大学医学部卒の四回目の同窓会は、発起人：土屋、蒲田、幹事：魚谷、土屋(高松)、越田(宮崎)で、平成二十九年八月五日(土)～六日(日)、前回と同じく、金沢市の奥座敷、犀川温泉郷「滝亭、新館離れ犀川」を借り切って行われました。卒業後概ね十年毎に開催していましたが、新幹線開業でアクセス向上の影響もあつてか、何となく話が盛り上がり、前回から三年後の再開となりました。卒業後初めて顔を合わせる仲間もいて、時の経つのも忘れて夜遅くまで話し込みました。やはり同窓仲間の居心地はよく、それぞれが大きな活力を得て、そして再会を約束して、全国に散りました。

同窓会に先立ち、我々の大事な同窓生のひとりである故西村元一先生が築き上げた「がんとむきあう会」の活動拠点施設「元ちゃんハウス」への訪問を企画しました。西村先生は、二年間余のご闘病期間中、がん患者さんへの支援を続けてこられました。この同窓会の二か月前に、天に召されました。三十年一月には、西村先生の悲願であった、がんとむきあう会、金沢大学附属病院、金沢市の三者協定を締結します。彼の遺志を心に刻み、それぞれの立場で真摯に医療に向き合うことを誓わずにはおられません。

稿を終えるにあたり、今回の同窓会にご参加され会を盛り上げて下さいました同窓生、残念ながら参加はできずも関心



を寄せて下さいました同窓生全てに、感謝とお礼を申し上げます。

出席者(敬称略)：石田浩、石田文生、魚谷浩平、宮崎(加藤)あゆみ、等原善郎、加納昭彦、蒲田敏文、川原範夫、川本潔、菊池豊、木多真也、黒岡雄一、小濱隆文、佐野正登、斎藤勝彦、酒井康一郎、阪上正巳、神原直樹、笹川寿之、佐々木正寿、佐藤士郎、里村吉威、澤重治、白崎直樹、澤(彩田)弥生、隅屋寿、竹川茂、土屋(高松)美津保、立花修、谷屋隆雄、津川喜憲、土屋弘行、富松功光、中川俊信、長田茂樹、野口善之、野村祐二、長谷川光広、布施春樹、藤村隆、堀本孝士、松沢信彦、松下栄紀、越田(宮崎)理恵、山田秀治、吉田政之

(越田 理恵 記)

### 同窓生の消息

#### 第三〇回

### 日本口腔・咽頭科学会総会ならびに学術講演会

金沢医科大学耳鼻咽喉科学 三輪 高喜

平成二十九年九月七日(木)、八日(金)の両日にわたり、ホテル日航金沢ならびに金沢市アートホールにおいて、第三〇回日本口腔・咽頭科学会総会ならびに学術講演会を開催いたしました。

本学会は、日本耳鼻咽喉科学会の関連学会の一つであり、金沢市では、前任の友田幸一教授が平成十四年に開催して以来、十五年ぶり二度目の開催となりました。第三〇回の区切りの大会であることから、「口腔・咽頭科学の過去、現在、未来」と「QOLの向上は口腔・咽頭からの二つのテーマを掲げさせていただきます。特に口腔・咽頭科学領域では、QOLと深く関わる、味覚障害、睡眠障害、嚥下障害を中心に企画を構成しました。

特別講演では、九州大学味覚嗅覚センサー研究開発センターの二ノ宮裕三教授に「味センサーの多機能性と味シグナルの口腔腸胃連関による食調節」と題して、近年、発見された味覚受容体が、口腔、咽頭のみならず、全身の臓器に存在し、それぞれの部位で機能に關連していることを講演いただきました。また、海外招聘講演では、台湾の睡眠障害研究の第一人者であるLi教授に「Intrapharyngeal surgery and integrated treatment for OSA」と題して、睡眠時無呼吸の外科治療についてお話しいただきました。招待講演では、奈良薬師寺の村上大胤管主にお越しいただき、「身心安楽」と題して、人間として楽しく生きるためのコツ、そして患者さんを楽しくさせるためのコツを伝授していただきました。

シンポジウムもテーマに沿って、味覚障害、睡眠障害、嚥下障害、経口腔的咽頭手術の

四つが企画された他、七つの教育セミナー、四つのランチョンセミナー、二つのモーニングセミナー、そしてイブニングセミナーと、盛りだくさんの内容を二日間に凝集できました。一般演題も本学会では過去最多の百七十五題集まり、活発な討論が交わされました。新幹線開通以来、初めてとなる金沢での耳鼻咽喉科関連学会であったためでしょうか、五百五十名余の方にご参加いただきました。会員懇親会では、会長の趣味に合わせて能登から加賀までの石川の地酒と、金沢の和菓子振る舞われ、夏から秋に移り行く金沢で、贅沢にも両方の季節の味覚をまさに口腔と咽頭で味わっていただけなものと思われまます。



# 医学類生ニューヨーク研修記

メディカル・イノベーションコース室長 絹谷 清剛

本学が、文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業において、「第三の道」医療革新を専門とする医師の養成事業 (<http://miraiinfo.w3.kanazawa-u.ac.jp/>) を推進していることは、これまでに本会報で紹介されてきました。この事業は、医療開発を行うことのできる人材育成のために、医学類学士課程、卒後臨床研修、大学院医学博士課程に貫した「メディカル・イノベーションコース」を設置して、学士課程では

研究への動機とグローバルな視野の涵養を行い、臨床研修から大学院博士課程では医療革新において実績のある特定専門分野の指導のもとに、実用化を視野においた学位研究をいち早く開始させようというものです。このコースの補助で、例年医学類生がニューヨークで医学研修を行っています。皆さんの後輩が世界に羽ばたくために熱心に頑張っている一端をお伝えするために、本年度参加した学生のレポートから、彼らの感じたことを抜粋し掲載いたします。医学類五年生の山本 和幸、加藤 雅晃、高山 秀雄、廣井 翼、関口 (旧姓 水口) 小雪、増田 佳純、西澤 会美奈、守屋 美知瑠の皆さんの健闘を祈念いたします (順不同)。

なお、学生たちの元原稿の英語版が、事業HPの次のURLに掲載されていますので、ぜひご覧ください。 <http://miraiinfo.w3.kanazawa-u.ac.jp/info/201708nyc.html>

模擬患者さんを相手に医療面接の練習を行う機会がありました。トレーニングを通して、自分の英語スキルの向上をよく感じることができました。英語そのものだけでなく患者さんとの会話によく集中することができ、次々と質問や言葉がでてきました。コミュニケーションにおける自分の長所や短所を学ぶことができ、とても勉強になりました。(関口)

実際の診療風景を拝見したり、日本の医療体制の違いを肌で感じたりすることによって、今までの漠然としたアメリカの医療に対するイメージがより現実味を帯びて具現化し、これから習得すべき課題を確認することができました。日本とアメリカの医療の良い側面を比較することで、何が患者さんにとっての良い医療なのかを再考する機会ともなりました。国際的なキャリアの積み方についても幅広く見識を広げることができました。(廣井)

アメリカで働いている日本人医師の病院を訪問させていただく機会があった。アメリカの患者は日本の患者よりも積極的に話す人が多いように感じ文化の違いを実感しました。また診察は英語で行われることが多かったため、それまでに学習していた内容が実際の現場でどのように用いられているか学ぶことができ、良いお手本となりました。(加藤)

レーズを教えていただきました。練習を繰り返しているうちに、最初は非常に難しく感じていた内容も少しずつ行えるようになってきているのを実感しました。医療面接の際に患者さんに質問する内容は日本と同じ部分も多かったため、日本の医療面接の勉強にもなったと感じています。(山本)

産婦人科医の安西医師を訪問しました。外国にいて不安を感じる日本人の妊婦にとって、日本人医師が検査をし、出産までサポートしてくれることは大きな安心につながると思います。病院には医師、看護師の他に、専門性の高い技師など多くのスタッフがおり、皆が連携をとりながら働いていたので、日本に比べて、働く人にとっても良い環境が整えられていると思いました。(守屋)

マンハッタンから電車で一時間半ほどの郊外にある東京海上記念診療所を訪ねる機会をいただきました。アメリカにいなながら日本人医師に診てもらえるということ、言語という点でも、診療そのものという点でも非常に安心することなのだと感じました。自分たちが日本で学んだこと、その知識と医療行為そのものをアメリカに輸出し提供することも私たちが海外で人々の役に立つ方法の一つなのではないかなと思うことができました。(西澤)

電子カルテシステムや研究設備、医療保険制度について教えていただきました。電子カルテシステムについては、アメリカのシステムはより網羅的かつ単純に、素早く問題を扱うことを目的とされており、アメリカの方が医師にとっても患者にとっても利便性が高いと思いました。医療保険制度に関しては、アメリカでは、

高い保険料を払い、保険の補償内容を常に気にする必要があり、日本よりも国民全員のためにならない制度だと思いました。本プログラムでは、国際コミュニケーション、将来の計画、医療全般について考える多くの機会に恵まれました。(高山)

病院やクリニックを訪問してまず感じたことは、個々の医師の専門性が非常に高く医療がかなり細分化されているということです。それぞれの役割分担が細かくはつきりしており、分業体制がシステムとして成り立っているという印象を受けました。このことは研究分野でもいえることであり、研究室には最低限の機器しかなく多くの作業は他の専門機関に委託しているとのことでした。こうした体制は各領域の専門性を上げるには効率的であり、アメリカが医療の最先端を行く理由の一つなのだと感じました。(増田)



学生課外活動支援報告

西日本医科学生総合体育大会

第六十九回西日本医科学生総合体育大会は、主管九州・山口ブロック、代表主管校山口大学の運営のもと、平成二十八年八月八日から八月二十日の十三日間にわたって開催されました。開催地が山口ということもあり、過去大会以上に参加選手の熱中症が危惧されておりました。実際、発症者が昨年より大幅に増加した競技もあつたようです。しかし、終わってみると大事に至ることもなく、また大きな事故・怪我也もなく、無事に大会を終えることが出来たと思われまます。

今大会における金沢大学の成績は、出場四十四校中八位でした。参加した学生の感想としては、「これまでの練習の成果が十分に出せた。頑張つて良かった。」というものや、「僅差で負けてしまった。すこく悔しい。」というものなど様々でした。

いずれにしても、今大会に向けて仲間と共に直向きに練習に取り組んだこと、大会を通して感じ、学んだことは私たち学生にとつてかけがえのない経験になったと思います。このような機会を得られたのも十全同窓会の先生方のご支援あつてのことであり、この場をお借りしまして、ご支援いただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

来年度の主管校は三重大学となります。どの部活も、今大会で見つけた課題に取り組み、選手個々が持てる実力を全て発揮できるように精一杯頑張つていきたいと思ひますので、今後ともご支援のほどよろしくお願ひします。

(主な大会成績)

優勝

男子陸上一〇〇m 石野雄士  
男子陸上ハンマー投げ 柳川龍之介  
卓球女子シングルス 石田静  
準優勝  
男子弓道部

男子陸上競技部  
男子陸上四〇〇m H 平戸佑樹  
男子陸上走高跳 白浜翔平  
男子陸上ハンマー投げ 市川輝人  
女子水泳一〇〇m バタフライ 村田美希乃  
男子スキー部 永井香月  
三位入賞  
女子弓道個人戦 佐野経祐  
男子陸上一五〇〇m 柳川龍之介  
男子陸上砲丸投 山田はな  
女子陸上三〇〇m 齋尾朱佑弓  
女子水泳一〇〇m 自由形 四位入賞  
男子陸上四×一〇〇m 有賀一永井一平戸一石野

女子水泳二〇〇m 個人メドレー 村田美希乃  
(第六十九回西日本医科学生  
体育大会評議委員 閑 隆太郎 記)

白山診療班活動報告

白山は石川県、富山県、福井県、岐阜県の四県にまたがる両白山地の最高峰で、日本百名山の一つに選定されています。日本には古来より山を崇拜する信仰があり、白山も多くの人に聖地として崇められてきました。歴史的には現在の白山比咩神社が紀元前九十一年に創建されたことから、その歴史は二千年にも及び

ます。「白山開山千三百年」とは、奈良時代の僧であつた泰澄が白山に登頂したことを起源としています。登頂後、泰澄は強力な霊験をもつ僧として人々から崇拜され、白山信仰が全国的に広まり、三千を越える白山神社が建てられました。白山比咩神社はその総本山となつて

います。そして白山診療班はその室堂に五十年以上の間、診療所を開設して登山客やスタッフの健康を守つています。白山診療所での生活は普段我々が思いもしない経験を与えてくれます。壮大な自然に囲まれ登頂する達成感、温かい室堂の人たちとの交流、医師である正班員の先生と共に患者さんと向き合う緊張感など、机に向かつて勉強する日々を送る我々にとっては経験することのできない貴重な機会となります。

少し山頂での貴重な経験を振り返つてみますと、日も昇らない時間帯に起床し、見渡す限り真つ暗な山道を、御来光ご祈願のため我々は登り始めました。同じように山道を歩く登山客は各々足元を照らすため、明かりを持って歩きます。空に浮かぶ星以外明かりのない深い暗闇の中、山頂まで五〇〇mにわたり縦一直線に連なる人々の「ともしび」を見たときは、同じ目的に向かって進み続けるという心の繋がりを感ぜずにはいられません。一本の光の筋が山頂に到達すると、室堂から御来光を眺める人々にとつて、それが荘厳な御来光として目に焼き付いたことでしょう。こうした感性が芽生えたのも、白山診療班活動の賜物であると思ひます。

平成二十九年度は七月二十二日から八月三十一日までの四十一日間にわたり、

百五名の患者の診察を行いました。本年度は昨今の登山ブームや開山千三百年に伴い、高齢者から小児までおよそ二万人の登山客が訪れました。それを背景に、心疾患や精神疾患など様々な基礎疾患を持つ患者も訪れ、白山診療所の意義が益々重要なものとなつてきています。本年度も多数の先生のお力添えにより無事に活動を終え、白山観光協会や診療所を訪れた方々からのお礼の声やお手紙も多数届いております。

末尾ながら十全同窓会の皆様には白山診療班の活動にご支援いただきました誠意に有難うございました。今後ともご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。

(医学類四年 山本 信 記)



## 立山診療班活動報告

立山連峰は、北アルプス北部に位置する標高三千メートルの天上界で、年間約百万人もの観光客が訪れます。石川県の人口に匹敵するこの数字は、世界一登山者の多い東京・高尾山の登山者の約半分、世界遺産である富士山の四倍程度です。私たち立山診療班は、夏休みの期間を利用し、立山で発生する疾病・事故に対応すべく富山県警山岳警備隊・山小屋・環境省と連携し、無償で診療活動を行っています。合計三つの山岳診療所には、夏休みの一ヶ月間に、例年百名ほどの患者さんが受診されます。

今年度は学生五十九名が診療所に入り、診療活動にあたりました。この数は医学類の部活としては最大級です。このように人気がある理由のひとつには、臨床の現場を実際に見てみたい、という我々学生の向学心があると思います。医師の問診・処置を間近にみることや、医師不在時に学生が対応し、電話で医師に助言を仰ぐといったことは、学生にとつて実際の医療との貴重な接点です。また、山小屋での生活も魅力です。太陽のまぶしく照りつける屋根の上に布団を干したり、溢れるばかりの星空を眺めながら、小屋の人々・医師・同級生や先輩後輩と送る共同生活は、印象深い思い出です。このように立山診療班は、人に役立ち、自分も成長できる、最高の部活です。

この会報をご覧の診療班卒業生の先生方も、学生時代を思い出しつつ避暑がてらにでも参加していただければ幸いに思います。今年も例年どおり二十名ほどの先生方



が参加され診療にあたられました。三つの診療所を抱える立山の診療には、もつと多くの先生方が必要だと感じております。また上述いたしましたとおり、我々学生にとつて先生方との山小屋生活は貴重です。もしご興味がありましたら、立山診療班 [kum.tateyama3015@gmail.com](mailto:kum.tateyama3015@gmail.com) までご連絡ください。卒業数十年経ってから初めてご連絡を頂き、医師として初参加された先生もいらつしやいます。学生の料理と立山の大自然が、いつでも先生をお待ちしております。

最後になりましたが、OB・OGの先生方をはじめ、活動を支援してくださった皆様、そして本年度も大変貴重なご支援を頂いた十全同窓会の皆様のお陰を持ち

まして、本年度の活動も無事に終えることができました。厚く御礼申し上げます。  
(医学類五年 谷村 純 記)

## ACLS金沢活動報告

私達ACLS (Advanced Cardiovascular Life Support) 金沢は、BLS (Basic Life Support: 一次救命処置) とACLS (二次救命処置) を中心とした救急蘇生法についての知識や技術の習得を目的として、学生同士で勉強会を行っています。具体的には、BLSに含まれる心肺蘇生・AEDの使用・窒息に対する異物除去などの基本的な技術に始まり、気管挿管・除細動などの専門的な治療を行うACLSまで、幅広い内容を勉強しています。座学にとどまることなく、実際に治療に使用する機材を用いた手技練習も行います。そのため、参加者は「正しい使い方」に加えて「どのような手技が最も効果的か」を自ら考え、実践することができ、全国的な医学部にACLSサークルが存在し、それぞれの大学が開くワークショップ (WS) に参加しています。

WSを通じて得られるものは、学的な内容に留まりません。「プレゼン力」に限られた時間の中で自分の伝えたいことをしっかりと伝えるには、どのようなことに気を付けるべきか、「行動変容」—自分のアドバイスによって相手の行動を「良い」方向へ変えていくには、何をどのように伝えたいか、「見せ方」—聴き手が記憶を定着させるために、どのような順番で、どの色やフォントを

使って、レクチャーを進めるべきか—など、SWIを意識して「教え方」を体得します。こういった、チーム医療を行う上で必要不可欠であるスキルを学べることや、全国の仲間と交流し切磋琢磨できることが、このサークルの最大の魅力であると考えています。

また、WSで救急医学を取り扱うことは非常に有意義なことだと考えています。学生同士で教え合うことで知識が定着しますし、何より「体を動かして」実践することができ、これは座学との大きな違いです。知識ももちろん大切ですが、そこにアウトプットの間が加わることで、より効果的な治療とは何かを学





## 医学展開催御礼

医学展も終わり日に日に寒さが増しておりますが、十全同窓会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

十月二十八、二十九日に開催されました医学展二〇一七は、二日目金沢マラソンが開催され雨も降っていたにも関わらず、二日間で三千五百人の来場者を迎えて大盛況のうちに無事閉幕することができました。十全同窓会の皆様には医学展開催に向けてご支援、ご協力を賜り、学生一同心より御礼申し上げます。

今年度の活動が始まった時、自分たちがどんな医学展にしたいかを考え「LIVE」子供達に夢を」というテーマを掲げました。この「LIVE」というテーマには「医学展が地域の方々の生活(LIFE)に身近なものでありたい」、ライブのように、お客さんである地域の方々と作り手である私たちが一体となり楽しみたい」という思いが込められています。医学展の歴史は古く、先輩方が築いた地域との密着性は私たち医療系学生の財産であり大切にしていきたいと考え地域との関係性に重点を置いたテーマとしました。また、毎年医学展は子供達が楽しむ場にもなっています。子供達が将来の夢を考えるきっかけになれたらという思いから副題として「子供達に夢を」としました。このテーマのもと学生一同力を合わせ、試行錯誤し、医学展二〇一七を作り上げました。

例年多くの方に楽しんでいただいている医学展ですが、今年度は新企画として「人気漫画コウノドリ」の複製原画展示や



キャラクターによるポスター解説」「手術支援ロボットda Vinci展示」「解体新書・キンストレーキの一般公開」を行いました。また、三年ぶりに開始したミスミスターコンテストでは出場者がウェディングドレスや着物を着て登場し、会場を沸かせ、金沢の銘菓が場内スタンプラリーの景品になり、来場者はたくさんスタンプを集めていました。このように地元企業の協力を得て、医学展が発展したことをとても嬉しく思います。

最後になりますが、同級生、後輩と一緒に医学展を作り上げることを通じて、たくさんの方の事を学びました。このような貴重な経験をできたのは、十全同窓会をはじめとするたくさんの方々の皆様のご支援、ご協力のおかげです。ご支援くださった皆様には改めて感謝の意を表したいと思えます。医学展は先輩から後輩へと受け継がれていきます。来年度医学展のさらなる発展を祈るとともに、十全同窓会の皆様には今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

(医学展二〇一七実行委員長

石林 健一 記)

### お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について寄稿をお待ちしております。

〒九二〇一八六四〇金沢市宝町十三一

金沢大学医学部十全同窓会 会報係

TEL 〇七六・二六五・二二二二

FAX 〇七六・二三四・四二〇八

E-mail juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

べる機会を提供することができます。今年度も新たに一年生が加わり、昨年に増して活発に活動しています。三月には神戸大学や福井大学で開催されたALS-WS、五月には信州大学で開催されたBLSとFirst AidのWS、十月には熊本大学で開催されたALS-WSに参加しました。

また、定期的に学内で勉強会を開き、胸骨圧迫や人工呼吸、気管挿管といった手技の練習をしたり、BLSやALSのアルゴリズムを勉強したりしています。北陸三大(金沢、富山、福井)のネットワークも存在し、この三県でBLS-WSを開催したり、勉強会を開いたりして、知識のブラッシュアップを図っています。

最後になりましたが、ご指導・ご協力くださるOB・OGの先生方や活動を支えてくださる救急部、麻酔科蘇生科そして十全同窓会の先生方に厚く御礼申し上げます。

(医学類三年 南川 真季 記)

## 十全昔話

## 病理解剖今昔

## 渡辺 麒七郎 (昭和四十年卒業)

我が国では一九八〇年代、年間約四万件の病理解剖(剖検)が行われていたが、一九九〇年代から減りはじめ、近年では年間約一万件に減少していると言われている。このような現状では、若手病理医が国内では十分な剖検の経験が積めないため、病理学会の斡旋で、現在でも多数の剖検が行われているハンガリー・ブタペストのSemmelweis医科大学への短期集中研修コースが数年前から設けられてもいる。私は長年当地金沢で剖検に携わってきた病理医の一人であるが、自分の体験とも比べ、剖検の現状についての若干の所感を述べてみたい。

私は昭和四十年(一九六五)三月金沢大学医学部を卒業し、インターンを経て翌年四月から同大学院(第二病理、石川太刀雄丸教授)に進み、病理医をスタートした。当時同教室には、米国の病理専門医資格を修得し帰国されて間もない武川昭男先生(現武川病理研究所所長、金沢医科大学名誉教授)が助手としておられ、先生から剖検手技や病理組織学を教えて頂いた。私が院生として在籍した4年間(一九六六・四〜一九七〇・三)の同大学の剖検数は千二百二十三例で、年平均二百八十例になる。我国での剖検が急激に増えだした頃に相当するのだろう。一方、金沢大学の最近十年間(二〇〇七〜二〇一六)の年平均の剖検数は六十三例という。大学院を修了後直に、国立金沢病院に奉職し、平成十六年三月三十一日

までそこに在職した(一九七〇・四〜二〇〇四・三。退官翌日から同院は金沢医療センターと改称)。そこでの在職三十四年間(うち三十二年間は単独専任病理医)の全剖検数は二千二十三例であり、年平均五十九例となる。金沢大学や金沢医科大学の先生方の応援のお蔭もあり、剖検も含め、何とかそこでの病理医の任務を終えた。退官前年の剖検数が六十九例であり、剖検数の減少を実感することなく退職した。なお、在職中の同院内科の剖検率は七〇%前後を維持したと聞いている。金沢医療センターの最近十年間(二〇〇七〜二〇一六)の年平均剖検数は三十三例の由である。

小生の院生並びに勤務医時代を通じ、臨床医、特にその指導層は、死亡患者は原則全例剖検をお願いするという認識があり、部下にもそれを強いたように思う。即ち、遺体から学ぶという強固な姿勢があった。診断の正否、治療の適不適、症状や症候の由来やその意義等提供した医療の質の検証に熱心であった。自分たちの誤診や不手際が明らかとなるというリスクを抱えながらも、剖検の承諾を得るのに大変努めたと思う。当然のことながら患者や家族との良好な信頼関係があった話である。剖検での問題例、教訓例等を広く広く公開することにも協力的で、臨床共々、学会や論文としてそれなりに発表もしてきた。剖検は概ね臨床診断の確認に終わることが多いが、時に全く予期せぬ大きな所見にも遭遇した。院生時代はその期間の剖検の約一割を、また、勤務医時代はその約七割を自分が中心に行ったが、どのような症例でも剖検からはそれなりに得ることが

あったと思っている。自分の経験してきた剖検体制はかなり厳しいものであったように思うが、臨床医の熱意ある剖検依頼に導かれ、それに何とか対応してきたものだったと思っている。

剖検数の減少は下げ止まったのであるか。また、剖検数の減少の原因は何なのであるか。画像診断や臨床検査の進歩、治療法の進歩、医療の専門分化や効率化、医師の業績評価法の変化、患者様化等の医療の大きな変化がある。臨床医は剖検をもう必要と感しなくなってしまうのか、あるいは忙し過ぎて余裕がなくなってきたのか、はたまた、努めても、簡単には承諾が得られなくなってしまったのか。様々な要因が複雑に関連しあっているであろうが、一部では病理側の問題もあるのかもしれない。近年Autopsy imaging)が徐々に試みられているとはいえ、医療の質の検証法として、我々は未だ、剖検に代わるものを見出してはいない。また、剖検は臨床医養成の大事な要の一つという側面も持っている。剖検数の減少は、結果として、医療の質の検証(非自浄作用)の軽視であり、また、医師養成制度の脆弱化にほかならない。この医療の質の検証を軽視し続けるとすれば、その専門職能集団の前途は益々多難というべきものであろう。十全同窓会の諸先生方は、剖検のこのような現状をどのように受け止められるのであろうか。

## 金沢大学医学部十全同窓会 会員情報変更サイトが新しくなりました

LOGIN 情報は、事務局より各会員あてに郵送でお知らせしております。

ご不明な点は事務局までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

TEL : 076-265-2132

Email : juzen-ob@med.kanazawa-u.ac.jp



## やんちゃは楽しい

### 川島 ひろ子 (昭和四十七年卒業)

#### 〈四十七年卒業は団塊世代〉

四十七年卒業は何かと話題になる団塊世代です。高校生の時に東京オリオンピクがあり、ビートルズを聞きながら右肩上がりの社会のなかで大人になり、バブルも経験しその後続く経済が停滞した時代にリタイアの時期を迎えました。以前は「人生という長距離走を全速力で走っている」「新しい社会現象を次々と生み出し、社会を大きく変えてきた」等格好よく言われましたが、高齢社会の現在では「二〇二五年問題の元凶」とことあるごとに言われ、肩身の狭い思いをちよつぱり(？)している前期高齢者です。

#### 〈無事入学しました〉

昭和四十一年春入学時の同級生は百五名(うち女子五名・四・八%)でした。嘘か本当か知りませんが、「定員百名のところ女子が五人入ったので、その分上乘せした」と後に噂で聞きました。その頃は「女性医師は実践力にならない」「女性医師の入局お断り」「入局したければ、一生独身でいること」等が日本の何処かで囁かれていたそうです。今こんな事があつたら大騒ぎになりますね。幸いにも私はジェンダーギャップをほとんど感じること無く、学生時代を過ごすことが出来ました。ちなみに五名の同級女性医師は、全員現役医師として男性医師と同様に仕事を続けました。

#### 〈小児科に入局しました〉

当時の小児科は、臨床の中でも医局員数の少ない教室でしたが、一挙に十名が

入局し、この数は伝説になりました。当時の教室の女性医師は二名のみで、男性医師の喫煙率が非常に高く、医局はいつも煙がたなびいていました。医局の真向かいにトイレがありました。なんと男女共用(！)で使いづらく、ずっと離れたところにあつた男女別トイレまで行っていました。またロッカールームも無く、エレベーターを降りたところにロッカーが並んでおり、時々男性医師の着替えにぶつかり、目のやり場に困ることもありました。しかし、教室の雰囲気は家庭的で非常に良く、そんな中でこのびのびと育ててもらいました。「やんちゃ坊主どもが、どさつと入ってきた」と先輩達に言われていたそうですが、期待通りの(？)やんちゃぶりを発揮しました。各自が好きなことを好きにだけやって、現在まで継続している多くの研究グループの基礎を作りました。当時は傲慢にも自分達がやつたと錯覚していましたが、多くの先輩達が引き継いできた仕事があつたからこそ、可能になったのです。また誰にも邪魔されず好き勝手にやつていきましたが、私達の知らないところで先輩達からははらしながら見守り、そして黙って何にも数十年たつて初めてそれに気づき、冷や汗がどつと流れました。若いとは傲慢で愚かなことですね！そんなやんちゃ坊主達を見守り育ててくれた先輩達に感謝、感謝です。

#### 〈外国留学しました〉

四十七卒業小児科入局者には優秀な人が多く、二名の教授ができました。私は迷惑をかけたばなしでしたが、一つだけお役に立ったかも？ということがあります。それは数十年ぶりに海外留学への突

破口を開いたことです。当時小児科のあつた研究棟五階は、どの教室も遅くまで仕事をしており「不夜城、五階銀座」等とMRさん達が呼んでいました。小児科も右肩上がりでのいい仕事が多々と生まれていましたが、不思議なことに長い間海外留学者がいませんでした。当時私のように遺伝に興味を持つ医師は変わり者(？)と言われるくらい少なく、日本の臨床遺伝は欧米に比べ三十年は遅れていました。そこで、生意気にも世界一の師匠探しをし、幸運にもアメリカのCOSY、オランダのERASMUS大学、カナダのBRITISH COLUMBIA大学で、臨床遺伝を三年間学ぶことができました。知り合いもいない、コネも無い、一度も行ったことも無いところに、たった一人で殴り込みかけたようなものです。今振り返るとよくもこんな恐ろしい事ができたものだとも自分でも感心します。しかしこれも私がたまたまそういう時代に巡り合っただけです。私がやらなくても、いつか誰かがやつたはず。やつぱり傲慢ですね。でもそれが若さの強み、武器なのです！

#### 〈行政(公衆衛生)に転職しました〉

公衆衛生は臨床医の協力無しでは成り立ちません。留学後医局を離れ、リアルな社会の荒波にもまれる毎に、何度も「同門」「同窓」という救助ボートに助けられました。どこにいてもこの二つは、協力を得る為の魔法のパスポートでした。若い頃は自力で何事も可能と錯覚し、同窓会の意味することを知らうともしませんでした。多くの経験を重ねた今、どの領域であれ、現実にはすべて人の繋がりで動いているように思います。公衆衛生

と臨床は両輪の輪で、どちらが欠けても医療は成り立ちません。十全同窓会誌百六十七号に、思いがけず「十全同窓会@霞が関」があり、びっくりしました。このメンバーがもつともつと増えることを願っています。

#### 〈若い後輩のみなさんへ〉

私は幸運にも臨床のみならず行政(公衆衛生)も経験し、外から医療を見る機会を得ました。よく「医師の世界は特殊な社会、医師は温室育ち」等言われますが、外の世界から見ると確かに特殊なところはありますが、しかし同時に、医師にとつていかに住み心地の良い、自由度の高い世界であつたかと再認識しました。二十一世紀になり長寿が当たり前となり、人生でいくつもの仕事を経験できるようにになりました。臨床以外にも、また日本の外にも医師の活躍の場はたくさんあります。無知、無謀、傲慢等が許される若いうちに「自分でツルハシを持ち、荒野に初めてのレールを敷く仕事」にチャレンジしてください。人の敷いたレールの上を走るのとは全く異なり、苦労も非常に多いですが、得られるものは何にも替えられないくらい素晴らしいものです。私は偶然にもツルハシをなんども担ぐ羽目になりましたが、結果として自分の人生で一番満足度の高い宝を得ることができました。それが何なのか知りたい方は、ご自分でチャレンジしてみてください。やつた人にしか分からない、秘密のご褒美です！

もしもう一度医師としてやり直しができるなら、今度ももつともつと勉強してWHOあたりで働いてみたいです。七十歳を目前にして来世の分の夢まで見ている、やんちゃ坊主のなれの果てです。

## 祖母と私の物語

四年 平谷 菜生

十全同窓会の皆様、こんにちは。医学類四年の平谷菜生と申します。金沢の街並みを引き立たせている木々が、赤、黄、緑、橙と様々な色に彩られ、とても色彩を楽しめる季節になってきました。私は昔から季節が変化していくのを目で見て、肌で感じて楽しむのが大好きです。人生も、また同じように様々なことが変化していくものだと思います。せっかく皆様の前で話す機会をいただいたので、今日は私の祖母の人生について、お話させていただきます。

祖母は裏表がなくさばさばとしており、はつきりと物を言う性格です。アブや蜂といった大きな虫を素手で駆除したり、フクロウと戦ったり、素手で天ぷらを揚げたり…とても豪快でした。祖母は生まれた時からずつと能登に住んで農業をしており、春には金沢にある私の家の庭に毎年いちご畑を作りに来てくれました。そのおかげで私は毎年春に友達を家の庭に呼んでいちご狩りを楽しみ、好きなのだけいちごを食べていました。また、私は幼い頃から長い休みになると、毎回祖母の家へ遊びに行き、夏には好きなのだけ手作りのスイカを食べさせてくれ、冬には必ずたくさんのお餅を作って待っていてくれました。

そんな祖母は、私が高校生になった頃、祖父とともにアルツハイマー型認知症になりました。炊事、洗濯、農作業などをするのが困難になってきて、さすがに二

人だけで生活することが難しくなり、金沢の家と一緒に暮らすことになりました。アルツハイマー型認知症とは、「認知症を主体とし、病理学的に大脳の全体的な萎縮、組織学的に老人斑、神経原繊維変化の出現を特徴とする神経変性疾患である。認知症の中で最も多い。——中略——患者・家族への問診、認知機能検査にて、もの忘れ（記憶障害）、物盗られ妄想、見当識障害、判断能力障害、失行、失認、失語、遂行機能障害などがみられる。」（病気がみえる 脳神経メディックメディア・2011）という病気です。現代の世の中でよく知られている病気で、今日ではテレビなどでも取り上げられています。ただ、授業で聞いたり、教科書で読んだりしたたくさんある病気の中のひとつという印象と、実際に祖母と一緒に生活して感じる病気の印象は、かなり違うものでした。例えばもの忘れ一つを挙げてみても、認知症といえはもの忘れをする、と文字にしてみればそれだけのことですが、日々の生活の中で祖母と話をしていると、「あなた誰やったけ」「菜生やよ」「あなた今学校通つとるんか」「大学生やよ」「なんで私は金沢におるんや」「物忘れの病気になって、じいちゃん二人だけでは暮らせなくなってしまう」「あなた誰やったけ」「菜生やよ」…この掛け合いがエンドレスで続きます。このように、認知症が進んでくるとそれだけ忘れる時間も早くなり、ずっと同じ会話が繰り返るのは当たり前のことです。しかしこれが毎日続いていくと、意外と私たち家族も祖母とどう接していくことが祖母にとって一番良いのか、考えさせられる場面が多々ありました。病気

だと頭では分かっている、優しく接しようと思っても、毎日の生活になってくると正直思ったようにいかないこともありました。また、祖母の話を一〇〇％受け入れてずつと話をすることも、私たち家族も人間なので、それでは無理がかかって潰れてしまうのではないかと、思いました。能登の家に戻りたいのになぜ帰ることが出来ないのかを納得出来ず、また自分で自分のことをしたいのに、思うように出来なくなってきたりしようもなくなり、悲しい思いをする祖母の気持ち、自分のことがだんだんと出来なくなってきた祖母を一番近くで手伝い支える母の大変さ、昔からの祖母のことを一番よく知っており、少しずつ病気によって変わっていく実の母である祖母のことを受け入れていかなければならない父の辛さ…様々な人の思いを間近で見えてきて、私はとても考えさせられました。医師は病気を治すことに重きを置いていると思いますが、患者さんには家族がいて、病気は実はその家族にとっても大きい存在で、強く関係しているということを忘れてはいけないと思いました。

先日、祖母が八十七歳で亡くなりました。私は今まで自分にとって身近な人が亡くなったことが無かったため、祖母の死は、初めて死と向き合う機会となりました。祖母が亡くなったこと、お通夜、お葬式にはとても多くの親戚や知り合いの方々が集まりました。一人の人間は一生の中で多くの人と関わって生きていくのだと改めて思いました。また、葬儀はこれまで私にとっても暗いイメージがありました。もちろん人が亡くなって悲しい気持ちを持って訪れるところでは

ありますが、亡くなった人との最後の別れの場所であり、お葬式の前日は祖母と一緒に部屋で泊まり、そのような場所があることをありがたいと思いました。祖母がお棺に入る前、汗をふきながら白い着物を一生懸命着せてくださった職員の方や、お骨を最後の最後まで素手で集めて骨壺に納めてくださった職員の方の姿を見て、とても素晴らしいと思いました。生と死にかかわり、最後の最後まで懸命に人のために働くその姿は、医師と繋がるものがあるのではないかと思います。

生前祖母は、様々な病気が進み、どんなに体が辛くなってきたても「ありがたい」と周りの人に言っていました。また人の悪口は言わない、いつも家族思いではたらし者の素敵な女性でした。亡くなったからも、祖母と血が繋がっていると思うと、誇らしく、それと同時に自分もすっかりしなければと思うのです。祖母が亡くなったことで、たくさんのお話を学ばせてもらいました。この経験をこれから自分の人生につなげていきたいです。大きいことを書きましたが、祖母がいなくても見守っていると思います、まずは目の前の勉強に励もうと思います。皆様、温かく見守っていただくと幸いです。これからもどうぞよろしくお願いたします。



# 家庭医療／総合診療医を目指す 後輩へのメッセージ

恵寿総合病院家庭医療科 伊達岡 要 (平成二十年卒業)

平成二十九年七月に受験した家庭医療専門医試験は、一日目筆記試験・二日目実技と口頭試問の二日間構成でした。筆記試験は百二十問百二十分。今年から試験形式が変わったので、まずは全体像を把握と問題用紙に回答の印をつけ、一周後に答案用紙へ書き写す事にしました。一問毎設定を読むだけで時間がかり、一通り終えて時計は残り四十分程。書き出し始め、一周目に悩んだ問題をまた悩み、四十問の回答を写し終えたところで残り十五分。焦る自分を落ち着かせて進め、残り三分四十問。大急ぎで埋めるも、試験終了が告げられた時は約二十問超が解答欄白紙。「難しい」と聞こえながらも全部埋まっている周囲の解答用紙を目にし、初日から致命的になった、と三年の研修期間が走馬灯のように浮かび手が震えた事を覚えています。なんとか気を取り直して次の日の実技試験と口頭試問を終え、合格発表は二ヶ月後。筆記試験の失敗が不安を日毎に募らせましたが、知人から「専門医であつてもなくても患者さんの前では一人の医師である事に変わりはないから」と言われた事を反芻して過ごし、無事に合格通知を受け取りました。その甲斐あつてか、山本 健先生を通じてきたる業績のない自分がこのような場に投稿する機会を頂戴しております。

先を進めたい方がいいですか? というものです。私個人の考えにすぎませんが、これは「自転車を右足・左足どちらからこいだらいいですか?」と同様に聞こえます。家庭医療の勉強を始める前に私は産婦人科専門医を取得していました。周産期診療では、胎児と会話はできないので親と会話をします。胎児の疾患・予後、その後自分達の生活はどうなるのか、と相談を受けます。妊娠高血圧・妊娠糖尿病のような母体合併症、内科疾患を持つ母親の妊娠計画、大出血や蘇生のような救急対応を行う必要が出てきます。婦人科診療では、性感染症から家族へのアプローチを行う事や、併存する内科疾患と手術や化学療法との兼ね合わせ、緩和医療に対応する必要が出てきます。きつとどの臓器別専門科であつてもその周辺に生じ得る事を含めた総合的な目線や対応が経年的に必要なようになるでしょう。対して総合診療もセッティング次第ですが、皆で分業を行う為には何らかの専門性を持たねば役割不明となるでしょう。診療を通じて足りないと思つた事を学びたい。それが家庭医療の領域に目を向けた理由の一つです。個人的な考えで一般性は持ちませんので、より普遍的な考え方としては岩田 健太郎先生が週間医学会新聞でジェネラリストとスペシャリストを考察した「ジェネシャリスト宣言」なる全

五十四回の連載(※1)をこー読いただけたらと思ひます。

もう一つ多い質問は「家庭医療と総合内科とはどう違うんですか?」というものです。どちらも総合的に扱うイメージがあるためでしょうか。総合内科専門医試験を私は受験してないので迂闊に申し上げる事はできませんが、出願時の提出物で何を問われているかの比較は一助になるかもしれません。総合内科専門医は、入院中受け持ち症例の二十例の病歴・退院時サマリーを出願時に提出とあるので、原則疾患ベースの捉え方がフレームワークになつているのでしょう。複数の領域にまたがる病態を深く理解していく事がこの制度からのメタメッセージとして受け取れます。対して家庭医療の提出物はポータルフォリオです。A4用紙十八枚には其

活者として捉える視点、これはどの科であつても心ある先人の先生方が経験的に行なつていふ事を言語化・体系化したものではないか、という事でした。

其「生体心理社会モデル」や「プロフェツシヨナリズム」といったおおよそ医学部の授業では聞き慣れないテーマが一行だけ書かれていて、当初は何を書いているのかさっぱりでした。診療を行う時には、エビデンスや医学的に正しい事等々、それらが目の前の患者さんの状況に一致しない時がしばしばあります。嚙下能力が低下している為、大きな剤型を口の中で一時間以上かけて溶かしてから飲んでい

研修期間中、同級生や後輩が順調に専門を深め、その研究成果や発表、活躍をSNSで見ると、自分は逆行や足踏みしているような忸怩たる思いに駆られた事が何度もありました。感染症医の青木 眞先生は、離島の診療所に勤務をした際に大きな病院で華々しく活躍する人々を見て、落ち込んだものの、目の前の診療に没頭し「横を見ると競い合う同期や仲間の医師ばかりが見えました。でも正面には自分の医師としての本当のMission、患者さんがいました」と考えるに至つたそうです(※2)。奇しくも私の知人も同様な言葉をかけてくれました。

後輩へのメッセージという題目に合わせて最後に。進路を考える際に自分がどのように成長できるか、という心配や不安にこれからもよく出会うと思ひます。自分の目の前の人はどういったものを提供する自分でありたいか。その視点は、皆さんの前に広がる隠れた選択肢を見出す一助になるかと思ひます。

その選択肢の中から、総合診療・家庭医療を考えていただけのならば。そんな皆さんと対話できる事をとても楽しみにしています。

(※1) 週間医学会新聞「ジェネシャリスト宣言」[https://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?rid=PA03035\\_06](https://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?rid=PA03035_06)

(※2) 感染症診療の原則「正面を見よう」  
<http://blog.goo.ne.jp/ideonsult/e/923a6e0beb8a11ac1a5ce309ce658e>

らどのよう道筋をつけていったか、という自己省察の記録がポータルフォリオです。作成を通じて感じたのは、患者さんを生

## 第十一回 金沢大学ホームカミングデイ開催

平成二十九年十月二十八日(土)、本学角間キャンパスにおいて、第十一回金沢大学ホームカミングデイを開催しました。歓迎式典には百九十一名、懇親交流会には百六十一名の卒業生及びそのご家族等にご出席いただき、大変盛況で賑やかな一日になりました。

歓迎式典では、最初に、本学合唱団及び出席者全員で校歌を斉唱しました。続いて、山崎 光悦学長の歓迎挨拶、山出保金沢大学学友会会長の祝辞の後、柴田正良理事・副学長から金沢大学の近況が報告されました。最後は、現役学生の現状について、今回初めて学生の留学体験



報告(二名)を実施し、出席者からは好評をいただきました。

特別講演では、「現代における健康、そして保健学」と題し、本学医薬保健学(研究)域保健学類(系)長 稲垣 美智子氏(昭和五十一年医療技術短期大学部卒業)に現代の健康とは何かを、ユーモアを交えてご講演いただきました。

歓迎式典終了後には、金沢大学学友会第七回役員総会が開催され、山出保学友会会長の再任を含む役員の一部交代の報告がありました。

夕刻からの懇親交流会は、山出保学友会会長の発声の乾杯で始まり、会場では、本学フィル(金管)により、開始前と乾杯後に演奏、中間に本学M.J.S(マジック・ジャグリング)によ

り演技をしていただき、懇親交流会を盛り上げていただきました。その後、恒例の揃いの法被に身を包んだ卒業生有志による「金沢大学校歌」、「北の都」、「南下軍の歌」の高唱があり、会は大いに盛り上がりました。

また、午前中にキャンパス見学会(四コース・八十六名)を実施し、医学コースでは、十五名の参加がありました。

次回、第十二回金沢大学ホームカミングデイは、平成三十年十月二十七日(土)に開催が決まりましたので、校歌を歌いに、懐かしい母校にぜひお越しください。(学友支援室長 村田 記 記)



### 金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員の紹介

学内編集委員は、山岸正和、太田哲生、蒲田敏文、中村裕之、横山茂(副編集委員長)、絹谷清剛(編集委員長)、篁俊成、和田隆志、佐々木素子、山本靖彦、濱口儒人の十一名。

学外編集委員は山口成良、柿下正雄、津川龍三、多留淳文、赤祖父一知、佐藤保、三輪晃一、橋本琢磨、中村信一、勝田省吾、山本健、山本博、大村健二、横山仁、大島徹、横山修、中本安成、常山幸一、若山友彦、中西清香の二〇名。以上三十一名で構成されています。

大井章史十全同窓会理事長には、編集委員会にご参加いただいております。本年もどうぞよろしくお願いたします。

### 編集後記

十全同窓会会員の皆様、新年あけましておめでとうございます。平成三十年が母校金沢大学と皆様にとり、益々発展の年となりますよう願っております。

大学や医療を取り巻く社会情勢は常に変動しています。近年、その変動が益々速くなっているように感じます。今年はいよいよ新専門医制度がスタートします。初年度にあたる現在の臨床研修二年目の先生は、専門領域や研修プログラムの選択に加えて、専攻医登録についての情報収集にも苦労されたことと思います。また、専門医の認定・更新の必要条件にも何かと変更があり、専門医の取得準備中あるいは既に専門医の先生も、要項の確認や必須講習会への出席に少し苦労されたかもしれません。平成十六年にスタートした新臨床研修制度はすっかり定着しましたが、経過では、地域医療や人手不足の診療科などの問題に対応して制度の改訂がなされてきました。医師の人材育成や地域医療に大きな影響を及ぼす新専門医制度についても、今後の動向が注目されます。

また平成二十年にスタートした医学類推薦入学枠の特別枠(石川県枠)は、今年も十名で維持されます(当初の募集要項より五名増員)。将来の地域医療をリードする指導的人材の育成を目的として設置された募集枠であり、地域の高い社会のニーズを反映していることと思います。今年も会報を通して国内外の会員の皆様に、母校の現況、会員の皆様のご活躍をお伝えするとともに、会員相互の親睦の場となるよう努めたいと存じます。会員の皆様の率直なご意見をお寄せ下さいますよう、編集委員一同お待ちしております。(佐々木 素子 記)